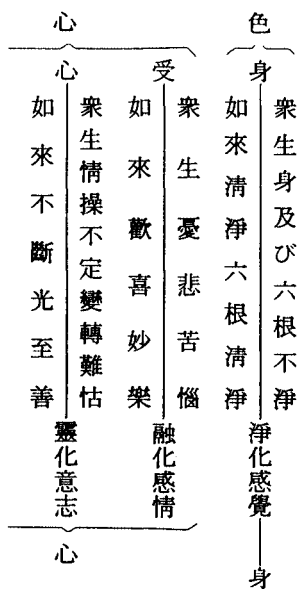


無
稱
光
(開發位)

念佛三昧向位

道諦、七科 三十七道品。

四諦は通じて佛教信條。道諦七科は宗教過程の條件。心靈生活は大小聖淨にわたつて同一形式。
(一) 四念處。



法 衆生無知無明 自覺知力
 如來智慧光佛知見を得て眞理

光明の要と能

染汚 苦惱 無明 罪惡……………宗教要

清淨 歡喜 智慧 不斷……………宗教能

宗教要 能

清淨……………厭穢欣淨……………身及感覺 濟美

歡喜……………拔苦與樂……………感情 人生幸福

智慧……………轉迷開悟……………知力 人生自覺

不斷……………廢惡進善……………意志 人格完成

現在を通じて永遠にまで

(二) 四正勤

一 未生惡令不生

- 二 已生惡令滅
- 三 未生善令生
- 四 已生善令長

(三) 四如意足

至心……形式

内容		
信(知力)	樂(感情)	欲(意志)
自己の染汚等を信認す	自己の染汚等を憎惡す	自己の非惡を解脫せんと
如來實在と實力を信ず	如來の慈悲智慧圓滿を愛樂す	如來の圓滿の人格に生れんと
仰信信	母子性的的	願作佛心
證解	大小合一的	願度生心

(四) 五根 及(五)五力

一、信

〔根、如來に對する信樂欲を以て安心の根を生ぜしむ。
力、正助二業を以て益信力を發達す。〕

二、精進

〔根、三心、精進の根、如來を信樂、精密に進趣せんとの安心。
力、正助二業を以て勇猛に精進して信念發達せんとの力。〕

三、念

〔根、如來を愛慕戀念して捨てず。
力、正助二業常に念じて捨てず益發達。〕

四、定

〔根、如來を念じて三昧的に如來と合一せんとの安心。
力、正助二業念佛三昧を以て。〕

五、慧

〔根、如來を信樂して仄かに曙光を見とむ。
力、〕

(六) 七覺支—開發位

(七) 八正道—體現位

註―四如意足（四神足）を至心、信、樂、欲に配するはこゝだけで外になし―

(一) 一、樂欲、二、精進、三、念（愛）、四、巧慧

(二) 一、欲、二、念（愛慕）、三、進、四、慧

(四) 一、欲（望）、二、欣（樂）、（慕）、三、（一）心、四、（巧）慧（四では精進が一心となつて居る―之は大正八年 講話（無親筆）

三十七道品

見佛往生とは、禪に謂ゆる見性成佛（けんしやうぶつ）のことにして、見佛往生に二機あり、頓と漸となり。

頓機の人は階級に互らず、一超直入如來地、一心不亂念佛三昧に入らば、機縁忽ちに淳熟して見佛し、頓に心機一轉して、光明の生命に入る。斯の如き機類、皆世に三昧を行じて、機縁熟するが故に、頓に三昧發得（さんまいはつとく）して、佛光に照されて無明の我が命終して靈的我と更（か）るなり。

漸機とは初發心より見佛往生に至るまで漸次に其道を進むなり。初め佛種を播下して信念萌發し、心靈花開き、靈の果を結ぶに至る。其方法を道諦とす。此の道をつぶさに七科三十七道品（しちしやうだいひん）とす。

斯の三十七道品なるものは、大小、聖淨に通じて、靈的生活の道程に於て同形式たる事は、例へば

植物中高等なる樹木も微細なる草類に至る迄種子より萌發し生長し花開き果實を結ぶに至る迄の生活の形式は同一なるが如し。

心靈的生活が、初めて種子を播し、つひに究竟圓滿なる状態に至る迄の道程の形式は同一である。之をつぶさに三十七道品とす。三十七道品とは、

四念處。

四正勤。

四神足。

五根。

五力。

七菩提分。

八正道分。

三十七道品を能く會得(くわとく)して、之に順じて階むことは恰も科學が階級に互つて科目を順次に授業に授かつて行くがごとし。

念佛三昧の靈的生活の開發は、一心念佛して三昧發得したる人にして、三十七道品の科目を知らざるも、學說的の道品の名義を未だ識らざるも、實際に修行して、單直仰信に眞直に突進し、三昧發得する人の如きは、未だ必ずしも三十七道品の學說に於ては識らざるも事實はすでに深く進入して奧堂に達するあり。それらは道品の名は識らざれ共其心理狀態に於ては一一其の道品と合して毫も違はず。

美濃國に一の老尼あり、道心堅固にして念佛勇猛にして三昧發得す。其の老尼に覺支の心理狀態を説示するに、一々其の心相と相應して違はず一々肯定して實に爾りとす。昔魯鈍なる農夫が俄かに發心し優婆塞達尊者(おぼせだうそ)の化導に依つて忽ちに羅漢果を得たる如し。羅漢果に至るとは、三十七道品の道程と七賢七聖の階級を過れども、彼の老農夫何ぞ其の階級を知らん。然れども其心理狀態を一々に試し驗すれば必ず符合すべし。

今は念佛三昧に依つて、見佛往生の道程を立て、行者の便に資すべし。

四 念 處

一に身は不淨と觀じ、二に受は苦と觀じ、三に心は無常と觀じ、四に法は無我と觀ず。

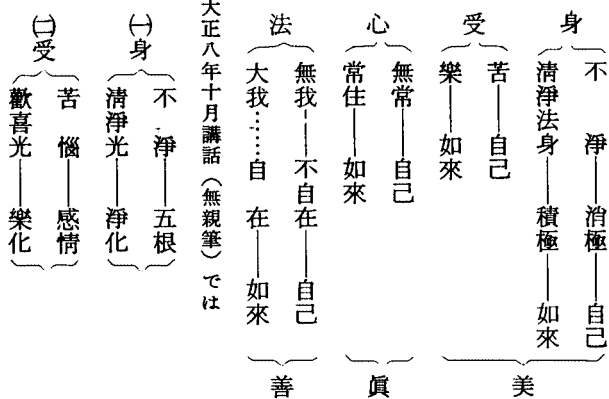
四念處は初めは身、次の三は心の、色受想行識の五蘊(ごいん)に他ならず。即ち吾が本來の身と心とは、不淨と、苦、無常と、無我と信認するなり。

人の本來の缺點を信認するは宗教の要を來す所以なり。人はもと完全無缺の性能ならば宗教の要なし。また人宗教に依らざるも、自ら解脱(げだつ)し成佛し得るものとすれば亦宗教の要あらざるなり。苦空無常無我の、罪惡劣機の我は死して、常樂我淨の彌陀の佛子と生れ更る處に、宗教の要と能とある所以なり。

如來は常樂我淨なり。念佛三昧の宗教、こゝに不淨苦無常無我の我を、彌陀に歸命して自己をさぐるなり。

常樂我淨、四德圓滿の彌陀の種子なる名號を以て種子となす。

大正八年十月講話（無親筆）では



(三)心	無常——意志
不斷光——善化	
(四)法	無我——知力
智慧光——啓示	

四 正 勤

註—大正八年十月講話（無親筆、(一)四神足、(二)四正勤と順序前後す）

一、未生惡令不生

二、已生惡令滅

三、未生善令生

四、已生善令增長

四正勤とは邪道を破し正道の中に勤行す。故に正勤（しやうきん）と名づく。

今念佛三昧を修し見佛を期す。正定の信念を爲して懈怠及び諸の煩惱の貪、瞋恚、睡眠、掉舉(たうきよ)、疑の五蓋を除く。

善惡の標準は、如來の聖意は一切の善を攝して遺りなく、自我即ち私欲肉我は一切惡の集る所、前に念處に於て如來の聖意と自我の罪惡を信認し、我は一切の迷妄罪惡の淵源なれば一切の惡は此肉我よりす。例へば荆棘の萌發する時はまた刺が生ぜざれども成長するに隨つて自己の刺が現ずる如く、肉欲我欲の煩惱また性癖惡習等が刺激の緣に遇ふ毎に發達す。

成るべく卑俗情虛榮すべての卑俗の情不道德の動機を忌みて聖き高等なる聖意に契ふやうにす。一切の自分の奥に潛める佛性は念佛に依つて引起さる。一心に如來の御力を仰ぎて、肉より出づる惡しき心は未萌に防ぎて生ぜぬ様にす。要する處は益々信心増長する處に其信樂心の退轉せぬ爲に常に念佛して心々相續し歩々に心光の中に向上せんことを願ふ。之を正勤となす。

十住毘婆娑偈に已生の惡法を斷ずることは毒蛇を除く如く未生の惡法を防ぐは流水を防ぐが如し、已生の善を増長するは甘果に漑ぐが如く未生の善を生ずる爲には木を鑽(き)つて火を出す如くせよと。善と惡の未生已生、この兩者は一切肉我と靈我との生命、此未生已生の生は全生命の生にて、肉我

は一切惡の根本、是動物我、若し此を恣にすれば惡として作さざるなく。天然素朴の間は善惡ともに未だ萌發せず本性に（近）く、人は肉ある限りは即ち三惡四趣の惡を性具する故に緣に隨ひ業に循ふて善惡共に發展し、兩者また主我的意識的に成らざる間は善惡共に未だ責任を認めず、主我意識自ら善惡の意識するやうになつて初めて責任となる。

肉我を恣にすれば世の惡緣に遇ひ漸々に惡が發達すれば全生命人格が罪惡格と爲る。（今）は全生命何れに向つて萌發すべきやの分岐點である。肉我の愛欲に隨へば内に煩惱の本能伏在し、外に種々の惡に誘惑し青年を墮落させる青樓遊客酒肆等の誘惑機關あり。また世俗的名譽權利等の虛榮利己心を増長せしむる緣あり。實に宿福淳厚に非れば端なくも青年の可惜精力を惡非の方面に濫費し全生を墮落するが如きあり。

然れども人々靈性ありて奥に伏す。此佛性は完全圓滿なる佛に成り得らるゝ本能である。奥に在るが故に最貴重なる寶物が寶庫の中の寶箱に納め在るが如く、祕藏せる寶物の如くに祕藏せり。之を開發するは祕密の鑰（か）を以て開くにあらざれば顯示し難し。

また善性は稻苗の如く、惡性は雜草の如く自然に繁茂し易し。能く注意し全力を注ぐに非れば惡の

草を芸(さ)り善の苗を長養するは易からず。肉には共通の煩惱ありてまた個々特殊的の性質あり習慣性遺傳的の性質あり。若し善の靈性が開發すれば靈我が自己の主人となりて正知見の光明を以て自己のすべての弱點を自覺して之を善導す。

靈我を發生せんには、靈我の大親なる彌陀の慈光に接せざるべからず。此に於て念佛三昧心行の要おこる。

四 神 足 (欲、進、念、慧)

欲とは希向慕樂して彼法を莊嚴す。

彌陀に遇はざれば自己の最終の目的に達すること能はず。故に彌陀を愛樂慕念して忘るゝなき心を養ふに、如來を愛樂し欲求する者は幸なり。此人は如來に愛念同化せらるればなり。行者此如來を愛樂する心を養はんには彌陀を愛念する善知識に接して懇に自己の信樂心の増長をもつばらにせよ。

如來は眞理なり。我らは本理想卑しく欲望また卑劣なり。唯己が肉我と肉欲樂を追求めて人格を墮

落せしむ。靈の我は理想も高等にして其望もまた遠大なり。諸々の賢聖は其理想も高尚なる故に宇宙最高なる如來を愛し聖意に契はんことを欲して、其欲望の動機から爲すことは人格を向上せしむ。

如來を深く愛する故に如來を見んと欲し聖意を得んと欲して止まず。愛慕欣欲の心深きが故に一ら如來を戀念して常に捨てること能はず。如來なる聖き慈悲萬徳の聖心を念ずるが故に、自己の心もますます靈性が萌發して自己の奥なる靈性と如來とは性質等しきが故に彌陀に接觸せんと欲して念念捨てず。

精進。靈に接せんとの念より、勇猛に精進し心々己を尅め身を刻して己が罪業の甚深なることを悲しみ、身命を顧みず一心に專精に如來の光明に己が覺醒せんことを努力す。念々に精み歩々に進む。念。己が雜念妄想の爲に虚^(こ)しく心力を勞し世間不眞實の樂の故に精力を徒費するの愚を算量し、善巧に如來の心を獲得すべき見佛の方便を覺りて一大事の目的を達せんとす。

慧。巧慧なるものは其機類に隨つて其趣を異にする其道に（覺）り易し。盜人は盜賊の業に巧にまた覺り易きが如く、常に見佛に心を用うる者は見佛の巧方便を覺る。

欲。欲の動機は自己が靈に生れ活んとの欲である。

天然の人の欲は根本は肉の生命を愛し肉の幸福を目的として肉に活きんとする欲望を全生命の目的として居る。其欲望は動物的にして、いかに點智は發達するとも自我を墮落せしむ。

今は靈に活きんとの欲。此欲望の動機は眞の靈我を愛するから發る。此の靈我として活きんには、靈我の親、萬德圓滿の如來を信樂し如來の恩寵によつて攝護愛育せられざれば、靈に活きることの不可能なるを信ずる時は彌々如來に歸命信順する愛樂の情は益々熾になるに至る。故に此の欲望の動機は如來を信じ如來を愛樂する心に本づく。

佛を見んと欲して身命を惜まざる、佛を見んと欲するは佛に活きんとの欲で、靈に活きん爲には劣等肉の生命を犠牲にすることを自ら甘んじて、獻げたる惡我の生命死して靈我の生命は生れ來る。靈我の生命生るゝが故に如來を見ることが出来る。佛を見るは自我全生命の佛に活きたる兆候である。

佛を見んと欲するには、念佛三昧を以て如來の恩寵を被むりて、自我の生命を復活する處にある。之れ靈に活きんとし如來を見んと欲して肉の生命を惜まざるに至るの動機である。

精進。眞實に如來を信愛し佛を見んと欲し靈に活きんと欲する者が、勇猛なる意志全力を盡して佛に觸れんと精進。此精進の精は米を搗磨せば糠粕を除くに随つて精白と成る如く、肉我の心や妄想雜念即ち肉の生活に伴ふ垢を除かんと勇猛心に念佛し彌陀に頼むのである。

念。靈に活きんとし彌陀を愛慕して忘るゝ能はざる念。

慧。巧慧。常に彌陀に觸れ見んと念がかゝる時自ら巧慧發明す。彌陀を見んと一の靈界の發明である。世の發明者は常に其の目的を念じて専心に工夫する。何とか機會を得て忽ちに發明するが如し。

如來を發見の巧慧忽然とし自己に湧起す。常に念頭に如來を憶念せざれば出來ぬ。

五 根

彌陀の本體はもと不可説なり是言思の絶する處。然共衆生をして信芽薰發せしめんが爲に名詞に依て其聖德を表彰す。況や彌陀尊は聖名を以て物を利したまふ。聖名によりて其聖旨を自己の心裡に實現せんことを祈るべきで、たとい彼聖名を稱するも其實現を自己の心中に祈るにあらざれば無意義のみ。其實在を證明し歸命融合安立し、靈化の性格として生活すべし。

いかに之を證明し靈化の實行を獲べきやを起行門即ち倫理門に於て明さんとす。倫理に資糧位加行位見道修道位とす。初め資糧位とは即ち恩寵喚起の時期なり。此信仰の素因は、不識的に神尊を憧憬し怖求せる心情に、彌陀の種子を寫象して印象し、之が元素と爲り、之を意識的に實現せんことに力めて修養す。

すでに尊號によりて性質意義を解領しぬれば、既に聖種を下したるなり。彼神尊を愛慕し萌芽微(三)しく萌發せんとする 信根。

信根。いかに信すべきや。正に信ずべし我等佛性本彌陀法身より賦せられたるが故にもと善なり。無始已來乖離して自ら煩惱の垢穢に覆はる。あえて罪惡深重にして生死の苦をうけ自ら出離の縁あることなし。尊(三)は我等を罪の中より救済せんが爲に、法藏と現じ、一切を普く救はんが爲に誓願を

立て淨土の門を開き此一門よりして一切を度脱し靈化せんことを誓ひたまふ。我らこの誓願を信じて疑ふことなく決定して深く信じ、御名を崇め、眞心深く信じ、愛樂し、望を專にすれば、必ず復活し更生して眞の生命となり救靈せられんことを信じて疑はじ。深く信念祈禱して信根を養ふべし。信根すでに成(なり)じなば信力を發達して信力を成ず。

精進根。專精なれば餘事を交雜えず進趣す。自己の心は垢穢なり。雜心龜想なれば悉く捨つべし。彌陀に專精なるべきこと摩尼の琢磨する如く、垢穢甚しく除き難し、最とも碎勵するにあらざれば心光顯はれ難し。尊(たう)に無量の德光あり。益々進むときは益々光を獲。

念根。念とは戀念して忘れざることなり。經に其心の戀慕するに因つて便ち出て爲に說法すと。専ら彌陀愛慕に凝神して念頭に捨つることなき。楞嚴(りやうゑん)に『十方の如來衆生を憐愍して母の子を憶ふが如し。若し子逃逝(たうせし)ば憶ふと雖ども何かせん。子若し母を憶ふこと母の子を憶ふ時の如くなる、母子生を歷て相違(ちがひ)せず。衆生心に佛を憶ひ佛を念すれば、現前當來必定して佛を見る。佛を去ること遠からず。方便を假らずして自ら心開くことを得。香を染る人身に香氣ある如し。此則ち香光莊嚴と名づくと。念根すでに成り之を發達する時は念力と云ふ。

定根。一心なり。意思を統一して一に彌陀に致すとき心寂靜にして、水澄淨にして月影を映するが如く、一心專注して深く朗なるときは佛を見る。

妄想散亂の意を捨て彌陀三昧の意に注す。覺想漸く微にして三昧に入り、心水湛然凝住するとき、彌陀の身心定心の水面に映現す。

慧根。よく簡擇して、自己の妄想分別を簡びのけて、巧みに彌陀の身心を把持して正觀分明にして是と非とを決擇す。正觀分明とは、三昧の中に感覺的には光明相好等を巧みに觀察し思想し、抽象的には神靈態恩寵正義等に於て諦かに觀察し、明鏡を執つて自ら面像を見るが如くならん。心の垢穢を除きて觀察明了ならしむ。

七 覺 支

すでに微かに曙光に接して、心靈めざめて從來の自己を返照する時は、實に我痴我慢の自分勝手の甚だしき自ら慚恥に耐えぬ感がある。未だ微光に接せざる程は、煩惱我が自己の闇と汚れと罪と惱とである事を自覺出來ぬ故に、靈我が喚起し心靈我が覺醒してからは、我煩惱の深重なる事が認めらるゝに至るから、大に奮發して靈體現前せんとの熱誠あり、然れ共是自己の能くする所ではない。日光を仰ぐに非ざれば闇黒は明けがたく、強く如來に接觸せんとの願望は益々煩惱我の業障深重なる事が感ぜざるを得ぬ。煩惱我が變じて聖我に更生せざれば永遠に浮ぶ瀬なき事を想へば、益々慈悲の親が戀しくなる。之が感情の信仰で如來愛慕の念が切々たるのである。如來と共に在り離れざる身となるに非ざれば眞の安心は出來ぬ。如來と不可離の關係は心靈の花開ける後に得らる。心靈の花は七覺の枝に咲き匂ふ。

信と念との五根を以て修養の功として信心喚起したる心靈は、五根に養はれて益々發達して心靈の樹が増長し枝葉益繁茂して、愈々心靈の花が開くべし。七覺は信心開發する心の作用である。

(一) 擇法とはすでに信心が喚起されて、如來を我が有(あ)とせん我如來の有とならん、我如來の中にいらんとする。然れども自己の胸中には種々の妄想煩惱が雜起し、如來の中に在る心は甚だ捕捉し難し、故に如來を眞實に信じ愛する。初めは擇(えら)として如來の中に他の妄想煩惱の爲めに捕はれぬように意を用ひねばならぬ。若し妄想邪念起る時は力(ちから)めてそれを捨て専ら如來に專注す。

(二) 精進。若し如來の光明の中には一切の靈、眞善美として悉く具有せぬはない。故に我を捨て如來を取り、勇猛精進し、靈は如來の子であるけれども、魔の眷屬たる煩惱我が跋扈して、如來と我との共に在ることを妨ぐ。そこで自己の罪惡を自覺するに随つて、業障懺悔(ごんげ)の苦悶が深く感ぜらるゝ。刻苦奮勵は恰も鑛垢から純金を煉り出す如く、靈性の實現に力むるのである。

如來の靈相彷彿として存(ぞん)るが如く亡(む)きが如くに感じらるゝ。信念強ければ魔の障も随つて強い。未だ毫も信心開發に心力を用ひざるものには、業相(ごう)もまた感ずる筈がない。

種々の業相現前するも敢て意に介せず、靈性現前に突進す。若しも如來靈相を得るに非ざれば寧ろ

死すとも動かじと一心金剛の如くならば何ぞ成功せざらん。例へば學業技藝等も熱誠に精練する時は必ず成熟すべきが如くに靈性發揮に熱注せば必ず成就す。之を精進覺支とす。

(三) 喜。喜とは三昧定中の前驅として現はるゝ心的現象にて三昧愈深く心念益微にして、靈妙なる定中の喜樂を感じ。此の甚深なる定の歡喜は未だ禪味を實驗せぬ人には想像も出來ぬ。

(四) 輕安。定中の喜樂を覺え、彌々純熟するに隨ひて、融朗にして不可思議、身も心も如來の中に溶け込みて、苦樂の束縛から脱け出で、我が亡⁽³⁾じた處に無限の愛と喜びに充されて、而して無限に抱かれて之と融合した處に身心の輕安を感じる。

(五) 定。身心共に大我に融合して、身心共に亡じたる如くなれ共、其絕對に沒却してしまつたのではなく、靈我を通して無限の大光に接するのである。神氣清朗にして片雲なく、麗日天に赫⁽⁴⁾き照すこと極まりなく、神祕の靈感、佛我に入り我佛に入りて、八面玲瓏として、内容の歡喜言ふ可からず。如來の愛に充され喜に充ち、三昧中に全く大愛に充滿され、全部が如來に抱擁され、歡天喜地、是三昧正に發揮したる状態である。

(六) 捨。すでに全く大我の中に自己の全部を攝められて、自己の心と大靈と合してよりは、必ず

しも意志の集中を要せず、任運自然に如來と離れず、すでに常恒任運に三昧中に在りて、如來心の外に我無きに至る。初めには靈悅は失ひ易し、細心の注意を要す、すでに純熟久しければ、無意識的にして佛と共たり。之を捨と云ふ。

(七) 念。念とはすでに如來心中の自我なれば、如來の泉源より流れ出づる我心念である故に、佛心即自心、自心即佛心、念々佛心と相應す。否佛心が自己の心を通じて發す。

啓示の三種

一、感覺的

佛智見開示せらるゝ所觀の表象は、大乘佛教の如くの三昧の觀相に豐饒なる宗教には、啓示の表明なる即ち所觀の境相甚だ多し、擧るに遑あらず。今三種の表相を明さば、

宗教的客體との關涉に、即ち三昧の中に先驅として、意識に發現し來るものは感覺態なり。感覺といふも主觀的な言を俟たず。

導師の觀經疏に、三昧の中にありて、五大皆空にして、唯識大のみあつて、湛然として凝住す。猶し圓鏡の如し。内外明照にして、朗然清淨なりと。此の想を作すとき、亂想除くことを得て、心漸く凝然として、後除々として、心を轉じて、諦かに日を觀ずれば、其利根なるものは一坐にして即ち明相現前することを見ん。境の現ずる時に當りて、或は錢の如く、或は鏡の面の如く、此明の上に自の業障經重の相を見ん。

行者若し彼境の光明を識らざれば、此日輪の光明の相を見て、常に此解(解)を作(作)さば、久しからざる間に、即ち定心を得て、彼の淨土の事(事)の快樂(快樂)莊嚴を見ん。

又行者初め定中に在つて此日を見る時即ち三昧を得定樂を得て、身心内外融液にして不可思議なり。

觀經に寶地觀を説きて、瑠璃地の内外映徹せる下に、金剛の七寶金幢ありて瑠璃地を撃く等、此想成ずる時一々觀じて了々に開目閉目に散失せざれ。若し三昧を得れば彼國地を見ることが了々分明にして具さに説く可からず。

觀經の日想と水想とは假觀また方便觀とす。日と水との經驗材料に凝神し、其の寫象を反映して成

就する時は念に隨ひ意思に隨て顯現す。

瑠璃寶地と寶樹觀、寶池觀、總觀は、依報莊嚴（えほうざうごん）と名づけ、此を觀ぜんには、若し聖經により或は曼荼羅（まんだら）變相の表相を印象し記憶し、自己に印象したる表象を投映して專想凝神し、而して思惟の中に、思想し憶念して、覺想あらば、彼の相を見るも想心中見と爲す。思惟（しゆい）の位なり。益々進化發達して、覺相（）止し、唯定心のみあつて前境と合するを正受（じやうじゆ）と爲すと。

次に閉目開目に三尊の寶像、極樂界中に徧滿すと觀じ、心眼開くことを得ば、了々分明に極樂國の七寶莊嚴及び佛菩薩の形像より光明を放つ、又水流光明及び化鳥皆妙法を説くを聞く。出定（じゆじやう）入定恒に妙法を聞く。出定の時憶持して忘れざれと。

導師曰く、然るに十三觀の中に、寶地寶華金像等の觀最も要たり。若し人に教へんと欲せば但（ただ）此法を教へよ。但此一法成ぜん者は餘觀は自然に了するなり。

諸寶林樹皆彌陀無漏心の中より流出、佛心は無漏なるが故に其樹も亦是無漏なり。

又眞身觀の阿彌陀佛身は眞金色にして相好光明照十方世界、佛相好光明、眉間白毫右に旋つて須彌山の如く、佛眼は四大海水の如く青白分明なり。身の諸の毛孔より光明を演出すること須彌山の如

し。

阿彌陀佛には八萬四千の相好光明普く十方法界を照して、念佛の衆生を攝取して捨て給はずと。阿彌陀佛を見上(みあが)れば即ち十方無量の諸佛を見る。

次に觀音勢至二大士の觀。

次に自身淨土蓮華化生、花開く時五百色の光來つて身を照すと想ふ。次に一丈六の像池水の上に在るを觀ず。又阿彌陀佛身量無邊凡夫心力の及ぶ所に非ず。如來宿願力の故に、憶想すれば必ず成就を得。阿彌陀佛神通如意、於十方國、變現自在、或現大身滿み虛空中、或現小身、丈六八尺、所現の形皆眞金色なりと。

是等は客體の妙色莊嚴を表明する感覺的啓示にして、すでに又感覺の妙相を知見せらるれば、是よりは進みて、斯の如きの妙色莊嚴を表明せる客體の内容には、最上無比の内容、無上の智慧、無限の恩寵等なかるべからず。如何に其内容を觀し上(みあが)るべき。

二、寫象的啓示

佛知見の啓示として、妙相莊嚴輝燁(おほはら)煥爛なる感覺的眞觀より進みて、客體の内容を觀ぜんと

すれば寫象的ならざるべからず。

觀經には、初めに依報莊嚴を觀じ、第九に至つて正報(しやうほう)妙相好を觀じたるは、寫象即ち阿彌の内容の無上智恩寵等を觀ぜしめんが方便なり。

宗教意識の客體に對して專心に憧憬するは即ち客體の内容にあり。即ち無限の恩寵によりて攝護せらるゝの愛念より、宗教衝動の内容憧憬として客體に關係を結ばんと欲するなり。然れども内容を戀念せば感覺的表明なる妙色相好を觀ぜんとするは是れ自然の理なり。而して妙色相好を觀ずる後は其無上の愛と内容を觀ぜんとするも又理の然らしむる所なり。故に觀經は初めに依報(えほう)より正報に進み、正しく眞身觀には阿彌陀佛の相好光明普く十方法界を照したまふことを觀ぜしむ。斯の如くに觀ぜしめたる所以は、無限の愛を表明したるに外ならず。この相好には自ら内容恩寵を表したり。無限の内容は言語說話を以て其眞意味を表すこと能はず。

念佛衆生攝取不捨の、衆生の心機と客體の内容との關係を啓示の内容とし、攝取不捨の語を以て表したり。これに無限の意義を有せり。

導師この意義を釋して、衆生行を起して口常に佛を稱ふれば佛即ち之を聞き給ふ。身常に佛を敬禮

すれば佛即ち之を見給ふ。衆生佛を憶念すれば佛亦衆生を憶念したまふ。彼此の三業(三)相捨離せず。故に親縁と名づく。

聖岡師曰く、觀行の人は佛を觀するも客體と主體とは彼此相待して觀見す。念佛の行者は無限の慈悲心中に在りて常に安住すと。

此の意は、實は此彼相待して感見するは感覺的啓示にして、無限の智慧の中に常に攝取せらるゝを意識すれば是寫象的啓示に接したるなり。彼此相待して觀見する主觀的なれば同一理性の發現に外ならず。然れども寫象の内容たる無限の愛を示さるゝは深密なり。また佛身を觀するを以て亦佛心を見る。佛心とは大慈悲是也。無縁の慈を以て諸の衆生を攝したまふ。慈悲の恩容に接するときは自ら無限の大慈悲たることを感ず。

無縁の慈は、一切衆生もと、阿彌絕待眞心の衆生及び一切の世界なれば、阿彌は無縁の恩寵常に盡十方無盡の法界に充塞して、常に一切を開展して靈化する。一たびこの恩寵を感じたる時は、時として處として啓示に接せざるなき觀念を遂げん。

次に寫象啓示として經に示されたるは、大經の下に若し衆生ありて明かに佛智、不思議智、不可稱

智、大乘廣智、無等無倫最上勝智を了する故に、七寶華中に自然化生(音)すとは是なり。諸智は明に了すとは唯知解に非ず、若し知解ならば誰人が解了せざらん。此智即ち一切智は、本法界に周遍して衆生の心機に關係し心機を開展して阿彌の中に攝取するところの性能なり。信仰の中に此の理性に個人は開發せらるゝが故に、自然と絶對の阿彌の聖意に契合して攝取せらるゝが故に、全く深く心開展して自己全く阿彌の一切智慧態の個人たることを明かに信ずるに至るものは此勝智態に致一したるものなり。解了と眞理と同じからず。たとい解了としては五智の義を理解せざる者にしても、自然に信開展し、阿彌の内容と致一し、其の内容を若し解剖せば、全然自然智(音)と契合せるものあり。文字に執する人の得て窮ふべき處にあらず。

寫象の啓示としては、或は佛の四智十力等を觀じて成ずるときは皆これなり。今は阿彌の宗教客體を表明する處の屬性をもて、全慧全能と神聖と正義と恩寵となり。阿彌の觀念には、神聖體にして無上の權威を以て主體の内面に嚴臨し、眞理の光とし自己の良心を發現して神聖侵すべからず。神的命令とし、無規定に道德態。

また正義としては、佛知見の義務として正道に活動すべき光をもたらし、恩寵としては、罪惡に沒

したる中より解脱して、無上なる無限の中に致し靈化する處の理を示し給へり。

この屬性はもと絶對無限の個人現として含畜的に啓示せられしが故に、もと絶對なれば個人現は意識の進むに隨つて益々明了に知見することを得べし。

三、觀念的眞心觀

三昧耶(やま)の中に、直觀を超えて、又寫象を超えて、次に觀すべきは理想態即ち法身觀なり。觀念的法身觀は絶對眞心の本體に對する觀念にして、絶對寫象の觀念に感覺性を排除し、概念を清淨にして、一切を集中統一態にすれば斯觀念なり。

絶對觀念は總括具象的にして、感覺ならず、空的寫象の如く、統一的にしては一の理想なり。

絶對眞心に對する觀念にして、他の感覺的及一切の心念を超越したる不識精神態にして、華嚴の泯絶無寄觀、絶對觀念の、一切の省慮等を超て廻絶無寄、般若現前、言語道斷、心行處滅。知を以て知るべからず唯證のみあつて相應す。心境冥合、冥心は智を遣り、方(ま)に茲に詣(も)つて境明かに、唯證のみ致一すべし。知解の境に非ず。冥合するは眞證。證即境、意識生ずれば本質に乖(へ)き、正念を失ふ。

眞實理性。本自如然、識亡智泯、是本眞。

此冥想的絕對眞心態理想は是客體の本體の表明に對する觀念なり。

初め、感覺的の啓示によりて初めて客體と關係致一たることを證明し、感覺的なるは客體の表面を表象し、次に進で客體の内面を省慮的に觀念し、神聖正義恩寵等の神的内容知見を與へられ、次に斯の如きの客體の本體眞身觀に凝神し、絕對寫象の感覺態と及び省慮等を除き、純粹理性態に智盡き意思斷盡する處、即ち絕對眞心即ち客體の本體なり。

かく觀念するを順觀とす。

之を逆に觀ずれば、先づ清淨法身即ち冥想觀の實體より、次に屬性たる一切能一切智の神聖正義恩寵等の屬性をもて莊嚴し、至眞至善至美眞理の最勝たる神的寫象を觀じ、次に客體の感覺的に表明したる無盡の相好光明眞金色にして圓光徹照し端正無比なる無上の威神と光明とをもて智慧と恩寵とを表象し給ふを觀ず。

更生

心の更正、宗教上の一大事は此心機一轉の更生する處にあり。即ち從來の煩惱我、即ち無智の我肉の我が全精神を支配したりしも、天性と理性との我が精神を支配せし無明の生活生死の生活が、神祕靈感三昧定中に、從來の肉我に死して、無明が覺醒して、靈我が顯現し、即ち光明中に生れ更(か)りし此眞我顯現が宗教の大事なる關門なり。禪の大死一番して見性したる時、基督教の聖靈に感じて靈に復活したる時なり。今は靈性開發して聖子に更生し、光明生活に入りし時なり。之を開發の位とす。

轉

換——消極と積極

佛知見開示して知力の機能致一。

心情解脫して融合入眞我。

意志靈化、大菩提心、實行活動。

開展——佛知見

恩寵開展の先驅として、人の意識に入り來りて、新しき感發として、從前の無明の夢を覺醒して、初めて佛知見啓示として、神的活眼を開くべきものにして、

導師定善義（ぢやうぎ）に、

行者一心に靜慮（じやうりょ）に攝心するに、初めに業障（ごうし）の輕重を知り、而して觀じ、五大皆空にして唯識大のみ有つて湛然として凝住す。猶し圓鏡の如し。内外明照にして朗然清淨なりと。此の想を成す時、亂想除くことを得て、心漸く凝定す。然して後徐々として心を轉じて諦かに日を觀ぜよ。その

利根なるものは一座にして即ち明相現前するを見ん。境の現する時に當つて或は錢の大きさの如く或は鏡の面の大きさの如し。

此の明の上に於て即ち白ら業障の輕重の相を見る。一には黑障、猶し黑雲の日を障ふるが如し。二には黄障、又黄雲の日を障ふるが如し。三には白障白雲の日を障ふるが如し。衆の業障も亦是の如し。淨心の境を障蔽して心をして明照ならしめず。三障盡く除きて所觀の淨境朗然明淨ならむ。

行者等若し彼の境の光相を識らずんば、即ち此の日輪の光明の相を看よ。若行往坐臥に禮念憶想して常に此の解を作(す)せ。久しからざるの間に即ち定心を得て彼の淨土の事の快樂莊嚴を見ん。

心を標して日を見るに想を縁を除いて念念移らざれば淨相了然として現ず。初行者初めて定中に在りて此の日を見る時、即ち三昧定樂を得て身心内外融液して不可思議なり。

又行住坐臥、身口意業、常に定と合せよ。唯萬事俱に捨てゝ失意瞶盲痴人の如くならば此定必ず即ち得易し。若し是の如くならざれば三業縁に隨つて轉じ定想波を逐ひて飛び、たとひ千年の壽を盡すとも法眼未だ曾て開けず、若し心に定を得る時は、或は先づ明相現することあり。先づ寶地等の種々分明なる不可思議の者を見ん。諸の行者若しは想念の中に若しは夢念の中に佛を見るもの即ち此の義

を成ずと。

啓示の先驅なるは感覺的にして或は明相、或は華を見、佛の好相、又は瑠璃寶地等の種々の莊嚴を感ずるあり。

知見開示して阿彌の本質に適合すべき理性(智)顯現するときは從前の意象に性惡を見ることを得、譬へば曦光東に昇るときは明らかに萬物を照すが如く、佛知見の啓示は自己の心中のすべての垢質を發見するが故に、醒覺してよりは進んで阿彌の中に適せざる自己の罪惡垢質を脱却せざるべからず。波羅密即ち度脫の過程は、一時に止らずいづれも中途に止まらずして、進歩すべきことは般若の如し。醒覺より三業四儀の中に時に應じ機會に隨て修練せざるべからず。

すでに佛知見啓示して客體の本質と性能とをよく認可して疑はざるが故に信位となす。阿彌の關係に本質意義に悟入し、其の眞理なるを證明するが故に信となす。この啓示によりて自己の内容として、自己全く絶對阿彌の自己なるを覺るが故に信となす。

すでに知見啓示によりて客體を證明するも、自己天然の主我及び天然の情操を轉依して全く阿彌の中に安住せざれば未だ解脫(つだ)と云ふ可からず。

消極の解脫。

人は天然なる煩惱潛在して此の衝動より惡業を現行す。この煩惱の所在を認識せざるべからず。楞嚴に、阿難よ、汝胸中の賊の所在を識認せよ。汝誤ちて賊を認めて子と謂(い)へり。爲に自ら解脫すること能はずと。又遺經に、煩惱の毒蛇睡て汝が胸にあり當に屏除すべしと。天性として潛在せる種子(しゆ)となす、是天然規定の主我なり。二に現行(げんぎ)とは種子が縁に隨ひ時に應じて現實に行動する處の要素なり。人には理性あるも之を制御すべき使命を有せる意志が之を制御すべきことを怠るが爲に現行す。この現行に就いては意志は怠慢の罪あり。このうち種子は主我根本惡にして次は怠惰の罪なり。

意志は理性に背きて許容罪は不注意によりて、おもはずも現行を作るに至る。人は自己天性の惡には責任を感じず。この主我惡即ち種子の賊の潛在する處を認識せざるべからず。人の三業の惡の現行あるは、一々の現行其のもののみならば、之を除くこと容易ならんも、其根本に種子即ち主我惡の賊

あり、之を知つて之を處分するに非るよりいかでか現行の源を斷たん。

自由意志あり。人は罪業の後には、他の行を行ひしをと欲するに至る事實は、此の顯れなるを以て、良心の責に苦悶せざるを得ず。この苦悶の感動は脱却し轉依すべき動機となる。こゝに於て、如何にせば之を脱却せん。人は菩提即ち道德秩序を損したるを感ぜば、いかなる苦をも忍びて償はざるを得ざるを感じ、後に良心の制裁に服すべし。すべての煩惱が現行によりて一々皆この現行あるは、其自己良心の道德律と衝突するが故に感ず。自己の良心は即ちもと佛性。阿彌の分身として自己に含蓄せる大（一）提の個にして、罪業は主我なるものと共に含蓄せる善と惡との衝突にあらずや。

罪惡は阿彌と相反せるが故に、阿彌と融和せんには、この罪惡を苦悶し、過去を悔ひ將來を慮る。罪過感情の益々深きに随つて、解脱を求むる情は又深くなる。罪惡の改革のために悔うるはよし。唯既往を悔うのみにして苦しむも、自克により脱却の爲めに改革のためにあらざれば益なし。若し此の感情を脱却するにあらざれば、融合の状態にすゝむこと能はず、罪過解脱の要は阿彌眞我に安住せんが爲めなり。現行の罪惡に苦悶するも、其の原動たる賊の所在を認識するも、これを滅殺するに非ざれば安穩なる能はず。睡蛇出でなば當に安眠すべし、未だ出でざるに眠るは是れ無慚の人なりと。

この煩惱を退治する心機は、之を認識する知力にもあらず、また之を苦悶する感情にもあらず、理性によりて煩惱に反應する意志にあり。道德の増進するに隨つて煩惱に對する意志の動力發達して罪惡を漸々に減ず。

此の煩惱は根本惡の天性なる意志の性能にあり。煩惱に對する反情は、本能感情的感動の性を有する惡を嫌忌す。天然の根本惡を脱し、尙根元の主我は所謂任運にして、末那(めが)の態といふべきものにして、俱生(くせい)の惑として、天然規定の法規にして、これをも滅殺の要を感じず。主我慾の罪過感情により、意志理性態は之を煩惱を滅殺せんとする自克によつて改善す。

之を脱せんとするも天性自ら度脱の能はざるを感じ、自己の煩惱を嫌忌する退治の力なく、苦悶極まつて感情の最高頂に抗(か)り、煩惱の過患を認識し、之を感じ意志はこの情操を轉化せざるべからず。轉換は消極の方面にして、其の中に積極の道心に化すべきは恩寵による。

釋尊の當に正覺を成ぜんと欲するに先だつて、十魔の障礙を破りたるは、この所の消息ならん。

釋尊、伽耶(がや)の道場に於て一心に金剛石上に座して、當に煩惱を斷じて正覺(しょう)を成(な)げんとするに先だつて、即ち精神の大光明を奮つて自己心内の煩惱魔をして、汝を降伏するに非るよりは、

無上の道意、即ち眞の道德情操を立つ能はずとの、理性の聲に、忽ちに主我の魔王は魔の屬性を率ゐて、交も動亂して道情を亂さんとす。内容に顯出する愛欲の魔女は種々幾多の妖姿と巧言とをもて佛性の意志を媚惑す。順情の魔女を却ひくればまた同時に異方面の違情の瞋怒等及び一切の魔の屬性は醜穢にして見るべからず。人を害すべきの煩惱魔にて交まじりも胸裏に紛擾して道意を侵害す。若しこれを滅殺するに制するに智力を以てす。斯の如く數多の魔屬あるも巨魁たる主我王を滅殺するにあらざるよりは、いかでか彼らを降伏すらんと。智力はかの賊首の主我を識り感情の苦悶は毒箭胸中に紛擾して、道意の意志之を轉換せんとして、魔賊いかに奮戦すとも、終に主我を滅殺して、微妙の法を得て、最善を成ず。良心苦悶の魔も伏して初めて醒覺して、消極に天然の主我の命終り、永く三界の苦輪を脱し、轉依の積極の方面は即ち微妙の法を得て、正覺を成ず。

道心轉依の積極方面

恩寵　微妙の法があかねさす曉にしてこゝろ覺醒し、朗然として無明の夢醒めて、佛知見啓示して、従前の主我滅殺して、精神一轉し來れば、是絶對無限の壽の中なる自己にして、即ち阿彌の智に

心を投じ、情操一變して轉化すれば、即ち阿彌の中の個人なりと醒覺し來つて觀ずれば、主我は即ち眞我の外にあるなし。煩惱の性即ち菩提なり。この情操を離れて外に無上道心なし。

唯從前の世俗野卑の情操を轉じて神的道情と化し、諸の煩惱悉く是菩提ならざるなし。是菩提を誤用して自ら煩惱とし、即ち賊を認めて子とす。情操轉換すれば更生なり。更生とは情操轉化して阿彌の中の生命として生々活動するなり。

念佛三昧七覺子

三昧とは等持定と云ふ。口に名號を唱へ、意を專注して彌陀を念じ、漸々に餘の雜念を薄らぐ、念ずる所の彌陀に神を投じ、彌陀が我れか我れが彌陀かと、離れぬ精神狀態に入りて、完き調和の成りし處を即ち三昧と云ふ。三昧を又直調とも譯す。直調とは對象とする彌陀の靈中に直覺的に集注して、完く能く調和し合一したる處なり。思ふに人は意馬心猿の如く、常に騒がしくして暫らくも止まらず。然れども唯一心に口稱三昧に入りて意を用うる時は、自づと直調となるなり。要する處は一心にあり。

三昧入神

三昧を行ずるには第一に入神を大切にすべし。入神とは自己の識神を彌陀の靈中に投ずるなり。眞に自我を如來の靈中に入るゝ時は、餘念全く亡じて恰も蟬の脱殻の如く、而して識神は彌陀の靈中に清き聲を揚ぐるなり。我れ彌陀に入るが故に彌陀我れに在り。月や我れ我れや月やと分かぬまでに、

如來に合神するを云ふなり。

世の技術などに於ても全く其妙を得んとせば其業に入神するにあり。王羲之が書中に神を入れ、吳道子が畫に魂を投入せし如く、何の道に於ても魂を業中に入れざれば其妙を得ること能はず。吳道玄が馬を畫かんとして一室に閉籠り、冥想に馬を畫けるを門人が隙間より窺ふに、道玄の身は見えずして唯白馬のみ觀えしと。他日又觀音を畫かんとして冥想に入り、觀音を意に畫けば、門人窺ふに人を見ずして唯觀音の影のみを見ると。之れ所謂入神の状態なり。卑近な例なれ共、好角家が相撲を見る時矢張り自己の力を其中に投入して見るが如し。宗祖が一夜佛間に在りて口稱三昧を行じ給へるに、弟子等が其音聲を聞いて、あまり朗らかに澄みて、いみじく尊くと感じて其隙より窺ふに、御身の邊り夕陽の如くに輝き居たりと。又或時は大身の如來現前せしことを門人らが拜み奉りけるとや。其時には三昧の識神が佛と爲りしや、佛が其人の心となりしや、この一體不二が即ち三昧なり。これを入神の境と云ふ。

三昧の思惟と正受

此事は觀經の「我に思惟を教へ給へ我に正受を教へ給へ」と韋提希が世尊に請ひし語なり。此は淨

土の莊嚴を觀るに就ての方法なり。導師は此を釋して、思惟とは彌陀の佛身淨土の莊嚴を觀ずる順序として、初めには法眼未だ開けざれば、先づ教を受けて其佛の相好等を想像に浮べる邊を云ひ、正受とは自己の靈性が發達し三昧も成熟せし故、法眼が開けて直覺的に靈像が顯現する了々たる邊を云ふものにして、之れ凡夫の想像の及ばざる所なり。喩へば初には障子を隔てゝ皎月の有る方を想見するが思惟にて、彌々障子を開きて正しく月を眺むるのが正受なり。正受と云ふは正しく彌陀の相好淨土の莊嚴を觀見し、法眼の開けたる處なり。法眼を開かん爲には識神が彌陀の靈中に投入せざるべからず。玆を導師は「此三昧を得んと欲せば瞽盲瘖瘵人の如くに成つて、彌陀の靈中に識神を投ぜよ。然らざれば心識騒がしくして定意散亂し、容易に法眼開くこと能はず。法眼開けざれば淨土を見ること能はず」と。

三昧入神の七覺子

念佛三昧の思惟を階級として正受に入る。其心行の順序を説明するものは七覺子なり。七覺子とは、一擇法覺子、二精進、三喜、四輕安、五定、六捨、七念是なり。是の七覺子は植物が成長して枝葉繁り遂に花が開くに例へん。之れ念佛三昧の心靈の開く狀態なり。

初に擇法覺子とは彌陀に入神の着眼點なり。正に正鵠を認定する。擇は簡擇とてすでに前方便の素養あるを云ふ。喩へば太陽と云へば太陽が心に浮ぶ如くに彌陀佛と言へば彌陀が思想に現はるゝ如し。然る時は夫が正鵠を擇びて心々連續して神^ニを其中に入るゝなり。動すれば雜想妄念群り出でゝ正境を亂さんとす。意思を凝して正鵠に向はしむ。擇法は是れ神を統一するの法にして、或は佛の白毫に意を注ぎ、或は總相を想ふもよし、また専ら名號に專注し、口稱を以て心を統一するもよし、要は一心統一して、彌陀の靈中に神を入るゝにあり。

二に精進覺子とは、正鵠に向て心々相續するに勇猛精進に身を責め己を摧きて靈性を發揮す。縱令彌陀の日光は照せども、金剛石も未だ研かざれば日光を反映するの性德顯はれざる如し。肉性を責め理性を碎きて靈性を發揮すべし。導師は一切の毛孔より汗を流し、眼より血を出し給ひしと。宗祖は極寒にも熱汗を流し給ふと。先聖すでに然り、後凡何ぞ倣はざらん。

三に喜覺子とは、一心に念佛する窓には彌陀の靈光射し來る。春風徐に吹きて和氣霽々と流る。三昧の兆候靈性に現ず、心益々微に入り心氣彌々朗かに、未だ旭日を見るに至らざるも東天すでに睽瞤をなす、此の時の歡喜天地に充つ、是れ喜覺子なり。

四に輕安覺子とは、神が確かに如來の靈中に入りて、定中の喜を覺ゆるに至れば、すでに神が如來に乗り得たるなり。如來に乗りえたる意は無我なり。無我無意識に爲れば心意は煩はす物なし。身心共に輕安を覺えて即ち我が有を感じず。

五に定覺子とは、心が漸々微に入り妙が加はり、彌々心靈の日光が顯はれ来る。金剛石に日光が加はれば、石は日光を我物として光を發射するが如し。月は天に在りながら我眼裡に在り、我が眼に在りながら月天にあり。如來が我となりしや我が如來と成りしや。徳本行者が、徳本が佛に成ることは難い、彌陀が徳本となるのは即今南無阿彌陀佛の常念なり。三昧入神の妙味こゝに在り。三昧入神、生佛冥合、この心靈の花開く時、彌陀の靈應正しく我靈性と合體す。春日麗かなるに色美しく香馥ばしき時、雄藥の花粉は雌藥に入る、是が此れ聖胎と爲り、眞の佛子と爲るの妙機なり。

六に捨覺子とは、捨とは任運無作とて念佛三昧の意思の用心が、初めに注意を怠るといつの間にか心が佛と離別すれども、漸々純熟するに随つてつひには注意を要せずとも自ら三昧を成ぜざるなり。例へば射を習ふにも、初めには餘程注意せざれば矢ゴロを失へども、能く稽古を積む時は自から的中するに至る。三昧も熟すれば自然に佛心と相應して離るゝことなし。

七に念覺子とは、念とは一人一日の中に八億の念あり。すでに佛子の核となりし上よりは、寤寐に念々に其核が中心と爲りて、恰も果實が漸々に長養するが如し。是れ即ち各自の人格を形成する元素なり。若し惡人にして地獄の性格と爲る者の核は、枳の如き果を成熟する爲に、日々惡業増上の働を積で地獄の種子を造り、夫が熟すれば身は人間に在りながらすでに地獄の業識が熟するなり。若し念佛三昧を以て業事成辦（念地地）する時は、身は此土に在りながら既に彌陀の種子を其人の心靈に成熟するを以ての故に菩薩聖衆と云はれ、其中心より起る三業の所作は悉く佛子佛心佛行となるなり。

三昧發得の證明

三昧發得は冷暖自知にて自己の實驗なり。然れども如何なる分齊より發得せらるやに就ては又證明を要す。

群疑論に錄する所によれば、三昧を得ることは何を以て知ることを得る、頗る聖教有て能く證知することを得るや。釋して曰く、但當さに憶想して心眼をもて見せしむ。此事を見る者は即ち十方一切諸佛を見るを以ての故に念佛三昧と名づく」此を以て證とすべし。行者平生に種々に修道すと雖も、三昧を得ずんば見佛すべからず。遂に見佛を得れば三昧を成じたるなり。若し三昧を得ざれば見

佛すべからず。故に三昧發得する證明は見佛にありと知るべし。喩へば人が目を患へば衆色を見ざるも、大醫師が能く眼を療治するに〇〇を以てする如しと。

靈驗の種々なる方面

三昧發得して見佛するとは、基督教にては聖靈を感ずと云ひ禪にては見性また大悟と云ひ、密家には悉地を得ると名づく。是等其名は異なれども要は宗教意識が全く基督教に所謂復活の状態に入りたる所にて、即ち活信仰と云ふ邊に於て同一なり。喩へば卵子が孵化して卵殻を出で雛子と爲りしが如き心靈の状態を云ふ。吾等衆生は佛性を具すと雖も、孵化せし鶏とならざれば、靈の生命未だ顯動態に復活せざるべし。從來の煩惱我が死して靈我が復活することに於て、禪に之を大死一番と名づく。是れ三昧發得の状態なり。名は異にして實同じ。恰も人の心が闇黒態より光明態に轉化せし處なり。其方面を異にするは感覺と感情と知力と意思と云ふ如く、三昧を得て佛の相好光明等を知見するは靈の感覺なり。佛の相好及び淨土の莊嚴は觀見せざるも、心が廣き天地に出でたる如き氣持ちに成りて法悅に滿され、感謝の情禁じ難き底に感じたるは、感情の方面に復活を感じたるものなり。また禪の見性の如く獨朗天真が顯はれ、本地の風光新天地に逍遙するもあり。佛知見を開示して佛の正道に悟入す

ると云ふ如きものもあり。超然たる大家に於ても、澄々たる秋天に皎月さやかに照して一點の雲なき状態に入り、實に涼やかなる澄心湛ゆれども、而も識神の愛に感ずるものあり。又暖かなる如來の慈悲に抱かれながら其感なきものあり。或は溫かなる春日和氣の中に無上の慈愛を感じながら、自性天眞の空を知見すること能はざるものもあり。大靈界の至眞と至善と至美との新天地に出でて、相好光明の佛及衆寶莊嚴の淨土を見ながら、而も自性清淨の天はとこしへに朗かなりと感ずるものあり。溫かなる慈愛の中に法悅の妙味を味ひながら、而も無生の法忍を悟るあり。自性は十方世界を包めども中心に儼臨したまふ靈的人格の威神と慈愛とを仰ぐもあり。眞空に偏せず妙有に執せず、中道に在つて圓かに照す智慧の光と慈愛の熱とありて、眞善微妙の靈天地に神（ひびき）を栖し遊ばすは、是れ大乘佛陀釋迦の三昧、又我宗祖の入神の處なりとす。冀くば識神を淨域に遊ばしむることを期せよ。

啓示の恩寵

如來の智慧光との關係に、人の佛知見開示し如來の眞理を信認し悟達するを要す。即ち如來の過境の實在を證明し、與へられたる知見によりて佛道増進の光明となる。即ち是れ如來の啓示なり。信は澄淨忍許の二義とは知的信仰に名付く。澄淨とは如來の恩寵の關係機能致一に、自己の心念疑雲已に霽れ信水已に澄み、如來の眞月を澄淨なる心水に靈感し、信心清淨なるが故にこゝに於て實在を證明し其本質意義に悟達し其過境的眞理なることを自己機能に實現し冷暖自知なるを忍許の義とす。

また智力的信仰は科學的の認識に求むるに宗教的關係の三昧定中によりて其實在を信認するにあり。三昧とは宗教的關係の機能致一の狀態なり。三昧は主體よりは觀照または靈感にして客體よりは啓示なり。智力的信仰は宗教的關係の觀照即ち客體の本質形式を知見す。即ち神の觀念或は相好光明または内包の徳たる慈悲、智慧、神聖を反映し客體化す。啓示はこの機能致一の觀照なり。

經に佛法の大海には信を以て能入とす、信は道源功德の母と。實に自から理性の承認するにあらざるよりは心情に於ても歸命憑依して安立すること能はざるなり。全く心情の安全を得るは、如來の實

在を信認して其權能に一任するときは必ず解脱を得るものと自から承認すればなり。若しこれを疑ひ確信あらざるかぎりは宗教生活は望むべからず。

啓示は宗教的意識を向上せしめる光明にして一たび啓示を獲てもそれに止るべきにあらず。啓示は常に不斷に宗教意識を高きに導く處の光として、人に與へらるゝ知見によりて向上し、人の信念の進むに随つて啓示は高等に顯現す。

宗教的意識が不識的の蓋然たるより正しく意識的に啓示せられ、其本質を證明し悟入するに至るは、信仰に三種の信認あり。

一、仰信 二、解信(解) 三、證信

仰信とは不識的に客體に對し歸依渴仰し對象を科學的に求むることを要せず、一心一向に過境的實在を信じ理性の批判を顧みず。

是宗教的意識の根本は心理的に觀ずれば、宗教的衝動をして其性能は原始動物より人類に至りて、神的需要の反映として其宗教的性能は歴史的に向上し、遺傳の恩寵として不識のうちに神的憧憬の念が萌發し、高きあなた雲井遙に歸依渴仰の信念と現はれ、いかにしても宗教的關係の眞實を得んと欲

求し、法華に所謂る、一心に佛を見んと欲して自ら身命を惜まずとまでに其人の戀慕を發するは是れ宗教的性能にあり。其本因は形而上より論ずれば法身如來藏性より賦與せられたるものゝ物と共に進化の人類として顯現したるものなり。

宗教的性能が代々の遺傳として向上し來りし此の素質こそやがて如來の啓示の恩寵に預るべき豫備にして、いまだ意識的に實在を證明するに至らざるも、宗教的關係の業因たる仰信なり。此仰信こそやがて眞の佛子たる啓示をうべきの卵、佛知見の摩尼寶珠と成るべき璞質なり

解信とは不識的の盲從的仰信より意識的に如來の本質意義を悟達せんと欲するに科學との對照により、また自己の理性をして満足得せしむべき處の眞理を理論の學說の方面に於て認識す。理論にては如來の啓示がいかに人の知見としうべきや如來の本質性能は之を名字の上に示さばいかなる表號を以て其内容を表明せるや。

また止觀の相貌啓示を表明することを錄する經典に、如來の相好圓滿なる表象を以て應身を啓示す等の如き教經文字に研究精密にして、啓示の表明及び證得の効果はいかなる精神狀態なるかの如きを明了に解して、理論としてはもはや疑團を止むべき餘地なきに至れば即ち解信なり。然かるに解信は

更に進んで眞實なる宗教的關係たる三昧の中に於て啓示を與ふべき豫備とし圖式として眞實價值あり。解信は宗教の實地の意識にあるざるを以てこれですでに得たりとせば、増上慢に墮し理論の病的に墮り文字の葛藤に縛されて、徒らに他の寶貨を數へて自から半錢の價を得ざるに至らん。現代の宗教を求むるもの理解を以て眞理を認識せんと欲するものに多し。實に理解は實地の知見の眼を開くべき豫備なることを識らず。哀むべし。

歴史的に普遍的啓示なる聖典語錄等及び歴史的に世界に顯はれ行はれたる教權文字の眞理は光明を照しつゝあり。故に學ぶべし習ふべし則るべし依るべし。然れども要するに之に縛せられざらんことを。

天台大師は闍禪と名字僧とを嫌ひたり。佛教廣大甚深なり。聖典及び古尊者の示したる龜鑑に依つて自分の啓示を證明しました益々向上し無邊の佛法海に優遊せんとするには學解なき闍禪者の能はざる處なり。

また佛教の眞理を知見するは觀心修練の功果として三昧熟し宗教的實驗によりて佛知見與へらるゝものとす。たゞ教權文字の中に佛の本質を發見せんが如きは不可なり。教經語錄等すべての解義なる

ものは其實啓示の材料とはなるべし。材料を以ていかに精に研くとも直に心靈を照すの光明と云ふべからず。畫ける太陽に明を求むべからざるなり。

證信の手段となるべき解信に依憑と直授の二種あり。前者は聖典及び祖師の語録等の依るべき處によりて自己の宗教の眞理を認むべきことを發見し、是れによりて自己の正しき理解によりて確信を立つるもの。空師が導師觀經の疏の一心專念の文によりて彌陀の眞意を解信したる如きなり。後者は傳承的面授にて師資相傳して宗教的眞理を傳承す。例へば大乘の菩薩戒を發得するは傳燈師に依りて受戒の時羯磨の一刹那に發得し菩薩戒の本質を解信する如きを云ふ。教經によりて如來の本質はこうこうなりと如實に解信しこれによりて得たる如來の本質を表明せる三昧の内容及び形式を理解し、之を以て如實修行の思惟の材料として如實に修行する時は廣大甚深なる如來の大海をも如實に知見することを得べし。

また傳承的の直授としては生ける經典なる善知識は已に自ら三昧海中に如實に啓示を得たる身にして自己の經驗を以て人に啓示を獲べき所の刺戟を與へるものなり。直授の刺戟は大に親躬的(かみづか)啓示の助成となるだけの功あり。しかれども直授の傳承と雖もそは資縁にして全く自己の直接の啓示に

はあらず。

佛陀宣はく、我説法は月を指す指の如く指は正しく月を指して教ふべくも指は指にして月にあらず、眞實の啓示は指すべくも觀ぜしむべからず。若し之を強て相傳の名を用うれば以心傳心なり。師の內的證明せる直接の關係によりて資(じ)も同く如來の本質を知見したるのみ。啓示によりて正しく自ら月を觀たるものなり。

若し如來の本質眞義を名字に實現し物理的に表現すべきものとせば傳承すべきも、例へば火てふ語即ち全く火ならば人火と云ふとき即ち舌を燒かん。こは擬すべく現すべからず。自ら親躬的に啓示されて始めて知る。之を證信と名付く。

證信は宗教的關係の實現を證明し實在本質を信認する正しく知見を與へられたるを證信と名付く。教典文字の解釋は天台大師の六即の中の名字即にして、いかに經論の文義に精通し講説を巧みにするも名字即(みづ)の分齊にして、全く自己の活ける啓示を得たものと云ふ可からず。これは自己に之と同じき親躬的啓示を得べき豫備とはならん。又教相の文義によりて啓示の相を信受せざれば躬(みづ)から啓示を得べき助成機關なきなり。要するに自己親躬的の啓示即ち冷暖自知の實地に至らんこと

を。故に傳承の啓示いかに名師によりて傳燈を熏くるも傳燈の名師は眞證の邪正眞僞を證明すべきも、躬親的啓示は自己と客體との宗教的關係に於て直接に直觀若しくは直覺に感すべきものにして之を傳ふべきものにあらず。

證信は眞實に躬親の啓示にて自證し得たるものなり。證信こそ佛子一大事因縁にして自から信心獲得し自己の靈性を開發し如來の聖靈が自己の心中に實現するにあらざれば眞の佛子と云ふべからず。眞實の啓示によりて直接に如來の靈應交渉を得。理性主義の宗教には見性(見性)または悟道又は佛知見開示悟入または悉地(見性)三昧發得と名付け、感性宗には恩寵獲得または相好感見または聖靈感得等種々の名を賦するも啓示によりて證信をうるにあり。

釋尊は摩伽陀(摩伽陀)の伽耶城(伽耶城)に遠からざる地に於て臘月(臘月)八日の曉明星出づる時に無明長夜の眠より廓然として覺醒し無上正眞の道を獲給へり。其證得する所の内容は大乘小乘に於て之を表明する處の相貌異れりと雖も、暫く大乘華嚴の説によれば、如來大悟の晨、佛華嚴三昧(三昧)に入りて自證の分齊を顯現し小乗の聲聞らは佛陀の肉體のみを見て眞の如來の内證の境界に於ては少分も窺ふこと能はず。

形而上なる眞の如來舍那(なりや)圓滿の法身(ほうしん)は無邊の法身の菩薩に圍繞せられて蓮華藏界に安住し、重々無盡の徳を以て莊嚴し給ふ。是の如きは佛陀自證の相のみ、他の窺ふべき所にあらず。また廬山の慧遠法師念佛三昧を發得し三度如來の聖貌を拜み淨土の莊嚴を感見す。また天台大師法華三昧を修して靈山一會未散(むれうぜんさい)を觀見せるを方便として旋陀羅尼(せんだ)を證得す。また善導大師が般舟(はんしゅう)道場に入つて淨土の依正(えせい)二報の莊嚴を感見する等はみな是れ宗教の眞理を自ら證明す。唐の懷感禪師(えいかん)の如きは始め解義をのみ事とし淨土の宗義に於て疑惑を懷きたるにつひに善導大師のために啓發せられて念佛三昧を修すること三年つひに白毫を感じ淨土の莊嚴を觀見し而して始めて證信に入る等。キリストのヨルダンにて聖靈鳩の如くに感ずる等、また伽葉尊者(かじやう)が釋尊の示し給ひし拈華(ねん)を見て開悟したる如き、其形式は種々にして一定せざるも精神に一點の光明を覺えて其の宗教的生命に入ることとは異ならず。この眞實の啓示即ち證信によりて智力的結果として無上菩提の曄瞳(けあ)とはなりぬ。

身心の統一と目的

精神は身體の内性にて身體は精神の表現である。此身心は統一的にして歸する處の目的あり。身體に就いても身は種々の生活機能の團體である。神經作用消化作用循環作用排泄作用等の機能を以て組織する。此の作用は系統的統一的に、目的ある如くにして、唯々器械的に働くにあらずして、法身が此身を活す所の理目的ある如くに觀らる。此種々の機體構造が無意義に連合するに非ずして機關悉く生理的統一關係に非ざるは無し。各部の機能も各目的あり。例へば目を構成する諸成分の統一聯絡ある、歸する所は物を見るを以て目的となす。一切の神經乃至一切の生理機能の各團體なる統一的の身體は一切の生活機能を構成する同一目的を目的とす。

各個々の生命もまた大なる目的によりて統一せらる。身體の各個々の機體は各自己の作用は別なるも相互に影響を及ぼす如くに一切の個體を構成する人類相互の間にもまたお互に影響交渉す。

有機的生理機能は生命持續を目的として活動するも此活動は意識的なるを要せず無意識的に衝動し

て消化循環等も自動的に循環し呼吸するなり。

然るに意志は能動的に自覺的の目的觀念に向つて選擇批判欲求し目的を實現するなり。

人の生活には消化循環呼吸作用の如く無意識的に生命保存の目的を營んでゐる。

また高等なる意識作用になつては精神を統一して目的を實現せんとする作用あり。

三昧による擇法には精神意志は其要求する如來を見ずに他の種々雑多の念が雜起す。其を排除して其目的に向つて進行して目的を實現せんと欲して努力す。目的に集注する時は觀念聯合には緊張狀態に他念が發現するも其勢力を壓して要求の目的を達せんとす。種々の雜念にかゝはるが故に意志は障礙せらる。之を一所に制し注集選擇精進の力を發揮して其目的を實現せんと欲す。

雑多の念より選ばれたる目的觀念を實現せんとする努力、意志の勢力、如來の靈應を實現せんと目的に精神を統一して活動して、此如來と云ふ一定の對象に凝神する注集する心的内容は漸次に明了に現はるゝは注意なり。此注意を妨ぐるは妄念、この妄想を制止し一心一向に努力し、心々相續して念念ずるの一心金剛の如く、此目的を實現せんと欲するに其結果として豫想が實現するに於ては

満足の快感生ず。若反對に目的を遂行する能はず豫想を實現せざるが如きは不快の感なき能はず。

三 味

目的たる三昧即ち見佛の目的を實現せんとする精進力、此の要求は宗教心に主體と客體との關係にて、唯自己の精神が客體の靈應に充たさるゝ處に、かゝる満足を得。然りまだ宗教に入らざる人は其儘にて不満なきも一度宗教心の如來の靈に滿さるゝ時は缺陷を自覺する時は敢て靈に滿たされんとの缺乏を感ず。若し闇夜に電燈を一度用うる時は燈光の要を感ずる如く、人の靈性は靈の力に滿ちざる時は不満なりと感ず故に要求努力は宗教的意識の完成を期す。

現在我は闇黒である。靈の光を要求す。また現在我の生命は有限である。永恒に生きんとする要求が起る。此靈的光明と永恒の生命とは宗教的關係の目的なり。主體なる我と大なる如來の心靈と融合し此大心靈の流は過去際より又未來際まで永恒に不變大生命の源なり。同一大光明大生命の中の一切の個々なれば、一切の衆生は同一の本によりて永却を盡して流れ來り常恒に互に感應し交渉す。此一大

目的は一切の心靈を攝して常に靈の活氣を與へ、相互に交感靈應して、大光明と大生命とを個々の身によりて實現す。

人の精神活動は内心に喘ぎ外界に奔蕩して須臾も休止することなく種々雜多の念慮に忙殺さる。如來に合一せんとする三昧目的觀念に向つて努力し、他の反對勢力を排して一定目的に如來を獲得合一せんとするは、初心には甚だ困難なり。此の百難を排して一定の目的に注意凝神し金剛心に克己沈着眞面目勇氣を以て精神修練を要す。

人はすでに經驗したる過去の事實を接續的に再現する性あり。富士山と云へば雪を觀念しまた阿彌陀佛には光明を聯念し或は極樂を觀念する如く、觀念聯合あり。

また純然たる觀念に聯發せられて聯合作用と成ることあり。例へば三昧冥想して佛の相好淨土の莊嚴等を想像する時明瞭にして外界の事物を目撃するよりも尙分明なることあり。

主我は經驗の自己、客我は經驗せらるゝ對象としての經驗、主我は意識の自己にして其自身の身體を認識す。主我は一致の觀念に過去刹那々々生滅變化するも過去現在を一貫して唯一不二の實體常恒の存立實在を主我とす。主我の存在を自覺するが故に對象たる客體にも亦主我存在を認定す。一方は主我、對象を對我とし、觀念集注する時聯合作用現はる。觀念集注の内容如何。

吾人が生理的に食物を攝取するは營養分を體に入れて生理機能によりて自己自體に同化す、對象感應も同理なり。對者と自己類化應同す。

雜念。人の意識は種々の雜念亂起して同一觀念を把住することは容易にあらず。意馬心猿外塵に動ぜられ内心に喝き劇波停め難し。種々雜多なる社會の刺激に襲はれたる習慣甚だ除き難く紛々と雜慮雜起し想像記憶等の念繁瑣に往來す。宗教の精神修行の要は雜念雜亂を驅除して純一無雜の思念を精練するにあり。明鏡止水無想無念の境に安住するにあり。一心專念自己の妄念滅却する所に如來は顯現す。如來の靈月を感じんには自己心水坦然たらざるべからず。

三昧の修行には意志の精練を要す。精神の力は意志にあり。意志の力強ければ感情及びすべての念慮を制す妄念を轉じて目的に向ひまたは滅止しまた抑制する等目的に向つて専心に強制するも、感情は活動劇しく或は烈しく熾るかと思へば忽ちに消ゆ。一定の選擇せる目的に向つて進み他の雜念を排却するは意志の力なり。念佛三昧は雜多の念慮を排して専ら如來に歸入す。純正目的は如來の中に入り如來の光明獲得する所にあり。

三昧には自己を虚無にするにあり。雜亂なる意識を滅却して純一なる即ち如來の靈光に充滿せしめんために意識を滅却すと云ふも、それは從來の妄なる我を滅却するは如來の靈光に滿され靈に活きん爲にして、心靈若し如來の靈に滿さるゝ時は靈的活氣全身に彌漫す。

念佛三昧は但觀念にあらずして専ら所念の如來を純一專注し心念統一專念に所念の彌陀を專念し目的を遂行せんとの心念なり。漸々に純熟するに隨つて精練されたる觀念は白日青天一點の片雲なく靈月麗天靈妙の活動、自己精神生命は全く如來の中に投じ益蓬玄に如來我にあり我如來にあり。古人が月や我我や月やとわかぬまで心にすめる秋の夜の月とは、此三昧の心理の消息を洩せるなり。

見佛の心的狀態

念佛三昧の所期は見佛にあり。されば二祖上人は別時念佛を行ずるに見佛を期せざるは功を成じ難しとの意を以て示されし。此に就いて見佛の心理的状態をいかに心得て豫期せん。見佛と云はゞ幼稚なる者の觀念には見佛は若三昧發得せば肉眼に對して玲瓏たる皎月雲の間より顯れたるを目撃する如くならんやと。或は心眼にても自己の心眼に對して客體が全く向ふに現はれたるを自己の心眼に反映すること肉眼の如くなるやと。

此に就いて暫く自己の經驗に本づき説明せば、世界の相対的なると靈界の絶対的なるとの區別を知らざるべからず。肉眼の感覺は相対的にして自己の肉眼と所對の物色との關係によりて視ることを得、例へば人に眼あり太陽ありて視ゆる。如來は自然界の太陽の如くに相対的關係にあらず、絶待の心靈界に待すれば、吾人の心靈は同體の分現なる自己の心靈なれば、如來大心海中の自己の靈波なれば、自己の根底大心海より自己の心靈に實現するのである。故に自己の絶對根底より自己に現じ、そ

れが反映して相待界の肉眼に對する太陽の如くに目前に現ずるを見る。絶對には實には彼此の別なく大小の分なし。其絶對大心靈界の方面なる如來心海より現じたる靈象此に現じたるが反映して彼に見ゆ。自己の心靈より起つて全く遙に旭陽赫々として光を放つ如くに彼に現ず。相好圓滿にして光明徹照す。彼此の相なき絶待の大靈よりまた彼此の相に現ず。然れども相待の日光と自己の眼と佛の相好の因縁關係によりて現ずるとは反對なり。日光は彼こより自己の眼に反映して視る。佛の相好莊嚴は絶對より自己の內的靈性に發現せるを彼の空界に投映して之を觀る。其靈象光明の赫耀たる徹照せる象また肉眼對象の物色の及ぶ所にあらず。

絶對如來心より衆生心中に現じたる如來相好及び妙色莊嚴なるが故に觀經に如來是法界身、入一切衆生心想中と。光明大師の讚に彌陀身心遍法界、映現衆生心想中、是故勸汝常觀察云々と。

三昧發得の靈的衝動

宗教の中心眞髓は精神の感情にあり。絶待的偉大と仰ぐ無比の美神を我有にせんとの衝動より發動

する情を靈戀と云ふ。即ち靈的憧憬なり。此の動機は信樂なり。如來は實に絶待的偉大なる靈と信じ、また相好端正にして無比なり。また己はあさましき凡夫なれども、如來はいかなるものも信樂愛慕して止まざれば、必ず慈悲の相好を以て自己に感應交渉し給ふものと信ず。

宗教の内容には靈應身と親密なる交渉を得て、生佛感應神人合一せんとする靈的衝動は、是靈的生命ある信仰の必然に勃興すべきものなり。「人をして欣慕せしむるの法門は暫く淺近なるに似たれども自然に悟道の密意は極めて是深奥なり」と。宗教の最深邃玄なるは神人交感の神秘融合の三昧的内容にあり。此神秘融合の密機に於て宗教の中心眞髓たる生命を發得す此に於て神我にあり我は神の有なりと稱することを得。

是植物に云はゞ春風除るに流れ來る時櫻花綻びて麗色を呈し馥はしきを放ちて造化の妙用を交感せしむると例すべき、神人交感の神秘融合の靈感ありて靈胎を爲して此妙機密により靈的生命即ち佛子と爲ることを得。

此神秘融合神人交感は宗教の中心的なれば此靈感を得んとするを靈的衝動また靈戀と云ふ。法華經に一心に佛を見んと欲して戀念して止まざるの心なり。

吾祖の、我はたゞいつか佛にあふひ草心のつまにかけぬ日ぞなきと暫くも忘るゝ能はざるの靈戀こそ吾祖をして三昧發得して如來を實に吾有とし同棲して不可離の關係を得せしめたる動機なり。

如來が六十萬億八萬の相好光明端正無比善美を盡して衆生に對するの表情那邊にあるかは知るべし。

孔雀などの類までも其の異性の愛を起させんが爲には益々美を發揮す。

況んや一切衆生動物慾に驅られてつひに墮落することを顧みざる群萌(ぐんも)をして、それらが靈性を回復して靈格を爲さしめんが爲には善美を極め盡して衆生を攝取せんとしたまふ。

靈的愛戀の情未だ發するに至らざるものは未だ靈性の成熟期に達せざるものなり。生理上の性慾未成が成熟期に至らざるものゝ如し。

孔夫子が賢を賢として色に易へよと云ひしも、賢人を慕ふこと好色を好むが如くせば自己が賢者とならむとの意ならむ。

彌陀の佛格

如來アミダはいかなる佛格なるか從來アミダ佛を説くこと區々たり。或は法身のミダあり。或は報身のミダあり應身のミダあり。また眞如身のミダ。或は神話的のミダ。或は擬人的表式の一隅に置くミダあり。或は厄病救除のミダ。また冥土の福祉を與ふるミダあり。また自然の因果律を宗教化したる酬因感果の人格的佛身の説あり。古來彌陀の説また彌陀に對する觀見區々である。

彌陀は大乘佛教中最も宗教的眞意の本尊、彌陀は本來宇宙唯一獨尊絶對的威力ある靈格を稱するものなれば、其實體に至つては不可説である。なれどもそれに對する觀念の種々に異れる所以は機見の區々である。即ち宗教的意識の階級によりて其對象其觀念の異なるは他ならず、佛教の眞理は本來異なるものにあらず、然れども機類に隨て其理を示すに相同じからず。

天台が佛教を判ずるに藏通別圓の四教を以て判別する如き、彌陀に對する觀念もまた然り。幼稚なる原始的宗教の爲には彌陀は現世幸福の守護神たるものと信じ、また超然未來の幸福主義の爲には彌

陀は未來の福祉を與ふる神と信じ、また神話傳記固執主義の爲にはそれに相應したる傳説を以て彌陀を信ず。

本來彌陀は絶對的偉大の力を以て一切萬法を統一する靈力なれば、宗教的信念に對する感應何れかそれ彌陀の靈驗ならざるものぞ。しかればそは唯彌陀の一分を信ずるに止まりて彌陀の全なるにあらず。彌陀の不了教藏通別教の説たると同じ。いまだ了教圓滿の觀にはあらず。

苟くも宗教的意識の客體なる本尊には獨尊統攝歸趣の三義備りて初めて本尊とし絶對的の歸命信賴も成立すべし。故に吾人の信ずる處の彌陀は法報應各別にあらず、三身一體の彌陀、本有無作の實體たると同時に、一切因果の法則を實現するの大原則にて、本然自性無始無終永恒活存の靈體なれば無量壽と曰ひ、また法界十方に徧滿し、一切の時一切の處を普く照鑑して一切を救済す故に無量光と名づけ、十方三世諸佛神明を統括する尊體の故に無量尊と號く。

故に楞伽經には十方一切法報應化佛一切菩薩等は悉く彌陀佛國より生ずと。實を尅して論ずれば宇宙間一切萬法を貫き眞理の存在するは是永遠無量光にして、自然界にも心靈界にも互りて一切の生々存在は悉く無量壽の顯現ならざるはなし。

彌陀本來絶對的眞理にして相待分別の人間の説の爲に左右せらるるものにあらず。大活眼ある者には活ける彌陀の大身心顯現し、分別固執の輩には分別分身の彌陀を信ず。法眼開く時は天體無窮地上の森然一として無量光の照さざる處なし。一切萬物の中に在りて神光輝く、萬物のみにあらず、人格の無量光の活現せる釋尊はいはずもがな、孔子、キリスト、マホメット等の聖賢悉く彌陀の活現に外ならず。

彌陀は法性身、本有無作(説也)の實體なれども衆生を度せん爲に方便法身を出す。即ち法藏の發願十劫正覺の佛身是なり。方便法身により法性法身を顯はすと、方便法身十劫正覺は即ち本有無作の無量光を世に示さんが爲なり。

大經は方便法身を説示して本有自然の無量光を顯す。故に吾人は方便法身を信ずると同時に法性法身を信ずるなり。

無相と相好

問、如來の法身はすべての色相に超絶し無色無相なりとも聞き侍りけるに、または法身相（すがた）を具すること三十二等の聖文處々に説きたまふことこれいかなる故ぞと。

答て。三昧の鑰（かぎ）を以て淨土の門を開き、如來の法身萬德圓滿のいと麗しき相好及び清淨國土の相を見んと欲せば、先づ須らく如來の本質はいかなるものなるかを知らざるべからず。今如來の法身を識らんと欲せば二種法身の理を解すべし。而して後次第して淨土に在すいと麗しき相好法身を拜むべし。

今聖曇鸞の論註によりて二種の法身説を暫らく解説せん。請ふ聽かれよ。曰く如來に二種法身あり。一には法性法身。二には方便法身となり。法性法身より方便法身を出し、方便法身によりてまた法性法身を顯はすと。そは如何なる理由なりやと云はんに、法性法身とは、本然自性にて即ち自性（じしやう）は天真佛とも本覺の如來とも名づけて、始もなく終りもなき本有自存の眞神にまします。之を學語にて云はば眞如法性等の名をもて其性質を詮表しまた實體實在などの名詞をもて詮表す。是性質より云はばまた宇宙精神とも云ふべきなり。

此永恒自然の本覺の如來の實體は本より以來本有常住にして一切の萬德本自具備し給はんも、ここ

に一度迷て無明に迷没する衆生にはこれを見するに由なし。衆生は此を知らず自ら生死に流轉せり。かゝる無明に迷へる衆生の爲に、本覺法身の一大靈力即ち大自在の力より、萬德圓滿の性德を現はして、八萬の相好、無盡の光明もて、普ねく十方法界を照して、信念の衆生を攝取して、本覺如來の終局目的なるネハン即ち常住平和の淨土に引接し給ふを方便法身とは名づく。

詳説せば、法性身の如來は宇宙に周遍せる一大心靈態にして、本無色無相にてすがたも形も超絶したる靈體にましませども、即ち無相と云も消極的の遍空の無相にあらずして積極的の無相にてあれば、無相は相として具せざるなき相なり。

本覺如來は法身大智慧の光明體にして一切處に周遍せる實在にましませども、自在無碍の力より一切の無盡の相好身を現じたまふ。

若し本覺の如來は無色無相なればとて、一切無盡の色相莊嚴の相をもて實現すべき德性が存せざらましかば、法性身は實在の德性が缺けたるものと云ふべし。

無相の實體より無邊功德の莊嚴身を現はし方便法身と曰ふ。方便法身とは一切衆生を本覺の都に歸趣の道を明にせんが爲の光として世に實現したまふ尊相なり。

これを方便法身と曰ふ。此の方便法身の萬德圓滿の相好を瞻仰して、衆生がこの感應力によりて自己の心靈が開發し心性開發し來て觀ずる時は、色相莊嚴の方便法身は本來無色無相の本覺法身と同一本體にして一切の相を絶超したる眞法身なるを識る。妙色莊嚴の方便身を拜して、それが爲に衆生が無生の眞理を悟るが故に法性法身を知見す。衆生は此方便法身の誘引によらざる時はつひに法性法身を悟得すべき理あることなし。これによりて方便法身より法性法身を出すことは盡すなれ。出すとは方便身の紹介によりて法身を見出すことなり。

例へば宇宙の大虛の實體に太陽を實現すべき一大能力あればこそ現在の太陽を現出すなれ、太陽によりて宇宙の實在にはかゝる能力の存在を認むる以上は、能力の實在が無くてはならぬと曰うごとし。

今觀經に明し給ふ、無量壽佛六十萬億の眞金色八萬の相好身、是の如きの無量塵沙の功德身は是如來一大靈力不可思議能の實現し給ふものなり。かゝる萬德莊嚴の相好身を實現し給へばこそこれを實現し給ふ法性法身の實在を證するならめ。

かゝる萬德妙色のすがたは現ぜざるとも、如來法身の實在は變ることなきなれども、これを實現せ

ざれば衆生を度すること能はざるなり。

二種の法身。——法性法身と方便法身。また大論の法身佛と生身佛

この理を起信論に明しぬ。如來は本法身智慧の身にして形も相（すがた）も得べきものにあらざるなれども、不可思議の一大靈力より無量の色身相好の身または金銀マニ眞珠ルリ寶玉をもて莊嚴せる美天國に快樂安穩美妙の相をもて現はれ給へり。而してその能現す處の本體は無始無終にて成壞（なり）の相なきものなれば、その現はるる處の色相莊嚴も隨て永恒不變にして破壞することも變し滅すること有ることなしと、故に如來の境界甚深なり慧眼なき凡愚何ぞそれ思議すべけん。

法性身と方便身とは本より二體あるものにてはなく、方便不思議の妙色莊嚴の相は法性本體の上の用相として現はれすがたなり。無量莊嚴の色相が即無相の實體なり。無相の實體と無量莊嚴の用（はたらき）相とは一體の兩面なり。さればこそ法性身の實體と同じく所現の色相も永恒に現顯して變易なく破壊なきなりと。

起信論にまた問を起して、法身無相いかがして相を現すやとの答のところに、如來法性身の相は大智慧の象にしてもと相なきこと譬ば鏡の體の如し。本來宇宙は一大觀念體の大なる圓鏡の如である。

宇宙が精神の大圓鏡なれば衆生の信念に隨てそれに應じてその反映として種々の相好莊嚴の妙色が顯現するものなり。鏡體もと相なきものなれども、これに對する人に對して其面影を映現す。

法性法身の大圓鏡もまた是の如く、法界は無形の精神態の靈智鏡に無量の形相顯現し重々無盡不可思議なり。

若し宇宙が本來如來の法身智慧の相にして大圓鏡ならば、いかゞして吾人は其智慧の鏡の中に在りつゝ其の相好莊嚴を拜見することが能はざるべきぞとの答に、そは疑問の如く法界もと如來智慧の鏡に相違なきも、その鏡に塵垢ある時は、其影像を映現すべきなし。若し鏡の塵垢を拭ひ去る時は忽に其影を映現すべしと。

吾人が心性は本如來の一大靈性と一體にして無二無別なるものなれども、この肉の我が無明の爲に翳して自己眞性の鏡がくもりて本來自性の中に無盡の相好莊嚴淨土の妙相を見ることが能はざるなり。之は何故ぞとならば、如來法身大智慧の鏡は吾人が肉眼の對象なるものにあらざればなり。吾人が心眼は迷没して無明に迷ふ故に見ることが能はず、若し如來の二種法身の相を知らんと欲せばいかゞしてこれを見ることをうるやとならば、これを知見すべき智眼を要せざるべからず。

又二種佛身——法性法身と父母所生身のこと

前に如來には二種の法身ありて甲は如來の本體乙は所現の相好法身なることはすでに説明しぬ。しからば能現所現何れも法身佛なることは同じ、此法身に對してまた他方面に衆生の爲に肉體をもて世に出現せる佛身あり、之を生身佛(じんぎふ)と爲す。此二種の佛身を説明せば、智論に曰く佛に二種あり、一法性法身二父母所生身。是法性身は十方虛空に滿て無量無邊なり。色像端嚴にして相好莊嚴せり、無量の光明無量の音聲あり、聽法の衆もまた虛空に滿てり。これもまた法性身なり。生死凡夫の所見にあらず。常に種々の身種々の生處にして種々の方便をもて衆生を度す。常に一切を度して須臾も息む時なし。是の如きは法性法身佛なり。

次に能く十方の衆生の諸の罪報を受くる者を度するは是生身佛なりとす。生身佛は次第に說法すること人法の如し。又云く法身佛は常に光明を放ちて常に說法す。衆生は罪あるを以ての故に見ず聞かざること、譬へば日出れども盲者は見ず雷霆地を振はせども聾者は聞ざるが如し。是の如く法身は常に光明を放ちて常に說法すれども衆生無量劫の罪垢厚重なることありて見ず聞かず、明鏡淨水面を照す時は則ち見るも垢翳不淨なる時は所見なきが如く、衆生の心清淨なる時は即ち佛を見、若し心不淨な

る時は則ち佛を見ざるが如しと。

此二種佛身の中に法性身佛とは前の方便法身佛なり、次の生身佛とは此界の人類に相應する人格をもて衆生を度せんが爲に出給ひし釋迦牟尼佛なり。釋迦牟尼佛は無明に迷没する衆生に相應せる肉體をもて八相度生の相即ち肉眼にて見奉るべき尊體なり。法身佛は肉眼の對象にあらずして法眼(眼)及び佛眼にて相應して觀すべき處の相好身なり。

佛 土

經にかような説あり。此三界を離れて外に世界ありと説くは佛説にあらずしてそは外道の説なり。そはいかなる義ぞと云はば、此三界とは即ち吾人が生息せる處の無限の宇宙にてあり。此の宇宙なるものは本來無邊際である。この無邊際なる宇宙を離れて外にまた宇宙が存在して彼處に佛及淨土存在すと謂うは謬見なり。

本宇宙は本來一體なれども衆生が自ら此の肉眼にてかく自然現象を感覺して居るものなれば、自家

肉眼の所見が全く實在なるものと自定したるも、佛眼等を聞き見る時は、吾人が未だ嘗て經驗せざりし淨土は忽ちに實現すべし、維摩(きやうも)經に斯ることを示されたり。

佛の言く、其心淨きが故に佛土淨し。諸佛がむかし菩薩の行を修せし時、其心淨かりしために其因業に報ふて感ずる所の佛土もまた清淨にてぞありと宣ひければ、側に侍する舍利弗は之を聽きて心ひそかに自ら解決し兼ねる疑團が胸中にあらはれたり、謂らく佛の宣ひし如く其心淨きが故に佛土淨しとならば、今佛世尊即ち釋迦牟尼が菩薩の行を修し給ふとき其心に於て不淨なることの在して、いまかく穢惡の土に於て成佛し給ふとやせん。若し爾らざればかゝる不淨の國に在ますことはなからんものをと。

時に螺髻梵王側に在りて舍利弗の言をききて即ち舍利弗に向ふて宣るには、いかに舍利弗尊者よ爾はかやうな言をなし給ふことなかれ。いかにとなれば、我如き凡夫でさへ今此現世界を見るに其美しきこと梵王宮と異るなく瑠璃衆寶を以て國土を莊嚴するにあらずや。尊者よ仁者は斯く人間としての肉眼をもて此土を見るが故に穢惡充滿の處と見るらめ、若し斯る生得の肉眼によらずして佛慧の眼をもて此處を觀ずる時は必ず清淨莊嚴無比なるを見給ふべきぞと。

時に世尊足をもて地を按し給ふに、不思議や曾て目撃しつゝある穢土は其影だにも遺(ひ)さず、忽ちに衆寶莊嚴の美天國と化し來り、瑠璃寶地に七寶行樹めぐり地より已上虛空に至るまで七寶の莊嚴萬物光輝を發し妙香馥郁として言語に絶せり。時に舍利弗奇異絕驚自ら然る所以を解せず唯呆然たり。時に世尊舍利弗に告給はく、舍利弗よ爾及び諸の衆生自ら業力(ごうりき)によりて現に穢土(ひ)を見る我は常に微妙莊嚴の淨土に安住す、如來は常に淨土に在ます。

如來が安住したまふ清淨國土の中に於て衆生は不淨なる瓦礫荆棘の國土を感ず。

しかれば吾人は佛陀の清淨なる美天國中に在ながら、いかゞせば其美天國に入ることを得ん。

本聖典に明しませる六十萬億の夜摩檀金の色に白毫の玉彩は妙高の五峯を合せ青白分明なる眸りは四の蒼海に比し、烏瑟(うし)は高く青天に碧を添たり。廣々たる珂雪の齒、八萬の相好は色相の極を現はし、無邊の光明は念佛衆生を攝取す。

是の如きの色相は如來一切靈力より本覺如來の性德恒沙の實相より顯現し給ひて衆生を誘引せんが爲に十劫正覺の唱ひを示せしかども、實は無始より已來本覺の法身と齊しく常恒に十方世界に周徧し

て淨土ならざるはなし。しかるに衆生何ぞ如來の清淨國土の中に在て衆生は穢惡充滿の忍土を感ず。衆生濁惡不善の世界に在て諸佛聖者は常寂光の極樂を觀ず。

吾人が生息する處の現宇宙を超て遠き彼岸に到りて初めて如來及び淨土を求むることなけれ。經に云く「アミタ佛去此不遠」。淨業成者即ちこゝに在て即ち瑠璃寶地に安住することを得べし。牆を隔てずして七重行樹は眺むることを得む。

萬德の佛身は心眼開く處に現はれ、光明赫耀の淨土は淨業成ずる處に感ぜん。

佛陀は心眼未だ曾て開けざる衆生の爲に暫らく萬德莊嚴の淨土を十萬億土の彼岸に在りと説けるも、法眼を開かしむる法を示してアミタ佛去此不遠と云ふ。是の如きの理由は能見の眼に種々あることを知らざるべからず。

五 眼

能感の心機種々あるが故に所感の淨穢自ら不同あるの眞理を明らむべし。

能感の機能種々あるとは佛五眼をもて――

五眼とは肉と天と法と慧と佛眼となり、

初め肉眼とは即ち吾人が人類として自然に規定せられたる機能官能なり。こは解剖學また生理學に於て物理的に研究すべき器械的なり、この器械的官能が器械的に自然現象界を感じするものなり。この機械官能の功用は物理的にして恰も眼鏡に前境の物色を映寫すると同じ用なり。さてここに於て此器械的の肉眼なるものなかりせば日光も明輝なるを感覺せず、天火もまた炳なりと見ざらん。盲者が太陽の光明を見ざるも日光それなからんや。之と同一く、人肉眼のみありて以上の四眼の境界に於ては吾人は盲者の謗は免るべからず。吾人は淨土に更生する人に對せば不具根缺の人といはざるべからず。

天眼とはいかなる感能の用をなすぞとならば、天眼とは天は天然即ち自然の理法なり。若し人の心意が外界の爲に動かされず、天仙の如くに從容として自然と同化し没しぬれば、自己の精神と自然界とは本來同一體のものにしあれば、自から神通感應して自然界中に現象せるものは神通して自己の心に感交し来る。

かの六通を得たる羅漢がここに在て座禪の床に坐して千萬里の彼處の出來事を感じするが如き。かの天眼の一端とも云べき催眠術によりて見るも、身は東京に在て西京の事物を見るが如き是なり。斯術に於ても其修練の程度熟達の成不あり、若し能く熟達して全く自然と一致し同化したらんに、自然界の一切の現象は掌中の珍果を見るが如しと、經中の文焉んぞ夫れ怪むに足らん。しからば經に天眼をもて千萬里の彼處の細塵を見ることが掌中のアンマラ果を見るが如しと。

主體の方は器械的の肉眼にあらざして、即ち自然と一致したる心眼にして、客體の方は自然界に現象せる色相を見るを天眼と云ふ。

次に慧眼とは智慧の眼と云ふことにて、之はやはり心眼にて、其對象となるものは自然現象界にあらず、即ち觀念界である。視よ吾人が肉眼は器械的にして外界に望む時、其距離が益々遠大なるに及んでついに感覺盡きて之を明瞭に見ることが能はざるに至る。然るに肉眼に藉らずして吾人が自から觀念をもつて宇宙の大を觀する時は、宇宙は渾然として一體、彌ふ心力を盡して觀する時は一大觀念態は法界に周徧し蕩然として一切の萬象の影は沈沒して現ぜず、混濛浩汗として大海を望むが如く、肉眼に現し來れる天體の無邊も悉く隱沒して宇宙無限の一體となり、能觀の心と所觀の界とは渾然とし

て一致し、能觀の慧が法界に周徧しこの對象となるべきもの一塵の影だにあるなし。かゝる觀慧を慧眼と名づく。

次に法眼とはいかなる境界を感じするぞとならば、先に説明したる慧眼は一大觀念態にして萬象の影もなくただ一大圓相の如く元來無一物の體なり。法眼の對象はその慧眼の一大觀念界中に顯現する處の靈的感覺なり。この對象を觀所成色と云如き、斯聖典に示せる處の衆寶莊嚴淨土の靈象、六十萬億八萬の相好身等は全く法眼所照の境界にして肉眼の對象たる感覺界に求むべからず。

若し人法眼を開き來て觀ずる時は處として衆寶莊嚴の淨土ならざるはなく、如來の相好光明遍滿せざるなし。斯る萬物が光明光輝を放ちつゝある淨土の中に在ながら、法眼未だ曾て開かざる衆生は美を盡し妙を極めたる美天國の莊嚴は觀ること能はざるなり。喩へば麗日輝きををさめんとする入日の夕ある光景を肉眼なき人は之を見る能はざると同じく、肉眼の失ひる者に對してこの光景を見えざるを嘲ける吾人はまた未だ法眼なくして美天國を觀ずること能はざるなり。然らばいかゞして法眼を開きて淨土の莊嚴を觀ずることを得べきとならば。

法眼は淨業成就の心眼なれば是自然の生得にあらず。前に二種法身の中に就て法性法身は慧眼をも

て觀すべき、方便法身は法眼をもて之を觀すべき對象なりと。

次に佛眼とは佛陀が萬善の修行の結果として本覺の體相用と一致したる處に成就したる心眼にして、佛眼は前の法眼と慧眼とを統一綜合せる慧眼にて、法慧の二眼は本より何れも心眼にして其體は同一なれども、其對象が甲は觀念界の差別の心象を見乙は無差別の實相を觀ず。之を統一せるものが佛眼にてあれば、佛眼をもて觀ずる時は宇宙一大觀念界の大圓鏡に重々無盡の莊嚴法界ありて存す。

佛陀は五眼圓かに明かに自然界と睿智界とを双照し、慧眼の無相界と法眼の高等感覺界とを併觀する大自由を得給へり。

ここに於て理感二性の宗教に理性宗はすべて感性を排除し先天的の觀念のみを重んじて、感性と云はば自然のみにあらず高等なる感覺靈象の淨土の莊嚴までを否定せんとし、感性宗は感性と曰はゞ宇宙大圓慧界の靈的現象なるを知らず、幼稚なる天然教と超自然教と併合せる如き衆寶莊嚴の天國は自然界を超たる彼岸に自然界のと同じき物質的の感覺界の淨土實在せりと謂へり。

若し大乘佛教の圓滿なる修多羅が教ゆる處に依て實修實行し、佛陀所證の極樂涅槃界を唯客觀の自然界に求めず、全く主觀的に實修し法眼以上の三眼開目し來て觀ずる時は、此を去らずしてアミタ佛

衆寶莊嚴の淨土を見ることを得べし。

五眼明了に開き來て始めて圓滿なる佛教を信ずることを得べし。或る一流の理性宗が偏執する如く佛界は唯偏空的の涅槃界に墮すべきなく、また凡夫が執する如く唯自然界の實在を實在と執する虞なかるべし。

淨土を開見する寶鑰

清淨莊嚴の國土は幼稚なる自然的實在に非ず。即ち極樂は吾人が衣食せる如きの物質的實在、即ち彼土の宮殿は金銀ルリ寶石をもて人工をもつて造營構成せし宮殿樓閣に非ず、また七重の寶樹は園丁の栽培より成立するものにあらず。衣服の莊嚴の具も裁縫擣染浣濯を要すべきものにもあらで皆自然應法の妙服とす。また食物にしても七寶の盈器自然に前にあり、金銀などのもろものゝはその思のまにまに其處に顯はれ、百味の飲食は自然に盈滿すといへども實に食するものなく唯色を見香を聞きて意に食せりとおもへば自然に飽足す。またこの清き國土は安穩にして微妙なる快樂あり。本より彼

處は無爲涅槃の靈界に在しませば、もろ／＼の聖者は智慧高明にして神通洞達し咸(咸)同じく一類にして其かたち異狀あることなく、天人とは名にこそ云ならめ、其實には清淨法身は宛がら虛無(虚)の身無極(極)の體。衆の物質元素より化合せられたる細胞の聚合物にてはあらじ。

されば觀經また無量壽經に詳かに讀し給ひしかの莊嚴淨土の光景は本より自然物素の成立したるものにあらざれば、かの淨土の門を開きて無盡の莊嚴藏を實見せんとならばいかなる鑰(鑰)をもてか之を開くことを得ん。

此につきて若しも淨き國を自然物素の中に求め全く幼稚なる物質實在の概念をもて淨き國の門を開かむと欲する如きあらば、そはつひに不可能の事に屬するのみにあらずかゝる理由は有るべきはづなきものなり。淨土國は吾人の如き唯肉眼のみの凡夫には其所在を認識するに由なし。斯ればこそ密教にては密嚴淨土と曰ふ。そは祕密莊嚴の義なり。祕密なる所以は、宇宙本來諸佛の清淨莊嚴の國土にあれども、衆生は佛眼なきが故に其中に住しながら之を見聞すること能はず。

實に全宇宙は重々無盡不可説の衆寶莊嚴海を以て充さるれども、そはみな諸佛如來海印三昧中の現象にして、凡夫が感見すべき物質實在の莊嚴にあらず。されば之を開くべき祕密の寶鑰はいかにして

之を吾人が手に入ることを得べきとなれば、他に求むべからず、如來は我等が爲に宇宙祕密の莊嚴藏を開くべき寶鑰を與へ給へり。佛陀が王舍城に在して韋提希(びだ)夫人の爲に示し給へる觀無量壽經こそ其の淨土の門を開くべき寶鑰なり。この寶鑰によらずして淨土の門を開くと云ふの理あることなし。觀經一部の金文をもて淨土の寶藏を開くべき寶鑰なりと云へども、聖典の全文また繁し、若し之を直譯に寶鑰にすることを得ば實にこれ幸福なり、單刀直入いかなる寶鑰がこれ淨土の藏を開くぞ。

我は生死の凡夫なり。若し天國の鑰を授かるの光榮にあらざれば、我は空しく闇黒の獄に沈ぬべし、ア、哀れ悲し。天國を開く寶鑰は決して形質のなかに求むべきにあらず。汝が心靈の深奥に秘める神の聖子在すを知らずや、神は汝が爲に天國に到るべきの豫地を與へ給へり、また天國を嗣ぐべきの素質を與へ給へり。

淨土を開く鑰とは即ち念佛三昧なり、念佛三昧とは、經には韋提希夫人が我に思惟(しゆい)を教へ給へ我に正受(しやうじゆ)を與へ給へと。この思惟と正受とが即ち淨土を開く鑰なり。この思惟正受をまた善導大師は念佛三昧また觀佛三昧をもて宗とすと曰へり。

祕藏の寶鑰

未だ法眼開けざる間は親しく淨土を見聞するの明なしと雖も、淨土と云も全く此宇宙を超て高遠なる彼岸に方域を定めたものにあらで、現在吾人が住める宇宙に於て吾人が業識即ち生理の器械的の肉眼に見る處を娑婆と名づけ、若し佛陀の見たまふ處の如く、佛眼を開きて觀する時は、ここが即ち常寂光(じやうじくくわう)の都なり。しからば修養して親しく如來の心光に接し淨土の樂園に逍遙することを得ん。

淨土遠きにあらず此身土を捨て何の處にか求めん。淨土甚だ近し、己心の中に在て顯はれん。

如來は淨土を穩秘し給はず、衆生自から隔つるのみ。之を礙るものは衆生自身の心中にあり。淨土を見るの明を障るものを無明と名づく。

如來は之を開くの寶鑰を授け給へり。

教祖釋尊之を王舍大城王宮に於て韋提希夫人の爲にひそかに授け給ふ。

釋尊が韋提希夫人の爲にこの寶鑰を授け給ふ因縁を説かば、觀經の序文是なり。

寶鑰とは即ち王舍城の王宮に於て教祖釋尊が韋提希夫人の爲に説給ふ一卷の觀無量壽經是なり。此

觀經とは即ち念佛三昧の鑰をもつて無量壽即ち神及び神の聖國を開きて親しく觀見すべき妙法を教へ給ひしなり。

觀經には先づ方便觀として初めに日想觀水想觀を修すべきを教へ給へり。日想觀とは先づ夕陽の重暉ををさめて斜に西山に入らんとするとき形麗しく大鼓の懸たる如きの相狀を見てこの印燒に意思を注ぎ一心一意専ら餘念なく思想觀念、神(三)を凝すときは最とも上根なるものは一座にして明相を發見することを得ん。

明相とは其大さ錢許りの如くまた鏡面の大の如き光耀晃々として喩へば日光の澄々たる清水に映ぜたる如く。此光耀が第一驅とす。或はまた微妙奇麗なる華を感じるあり。または瑠璃寶地等の種々不可思議なる靈感を實驗することあり。近頃或る青年が病床恍惚の間に光耀に感觸せるを甚だしく自から世に吹聴せるあり。それらは若し眞面目なる宗教家ならば自から祕して他聞を慎しむべきなり。殊に光耀を感じし如きは、若し専門家の門に入り軌矩を得て之を修養する時は導師の曰ひし如く一座にしてこの光耀を感じする者あり。

尙進んで觀佛三昧に神(三)を凝し觀察を用ゆる時は、觀經に說相たるルリ地の内外映徹せる光明華

の如く星月虛空に懸處せる如き百寶合成の樓閣は蒼天に聳へ七重行樹は衆寶をもて莊嚴し寶池には功德の水湛へ水はマニ珠玉より噴出したまた無量の光を放ち、光より百寶の化鳥を化出する光景等。

また無量壽佛は閻浮檀金(くわんどんご)の色八萬の相好光明は普く宇宙を照す。

これ觀經の所説暫く美天國の縮圖を略説せるに外ならず。

觀經は天國を開くの寶鑰として韋提希及び一切衆生の法眼の失ひたる者の爲に説給ふことはすでに信ぜり、而してまた日想觀の方便は吾人が法眼を開くの妙法なることもすでに承認せり。然るに今進んで愚生が求むる處はすべての方便を捨て驀直に如來の心光と接觸すべき法あらばこれにつきて直に凝神、精神を修養せんとすと。

されば、善導大師は、本經一部の宗教とする處、觀佛三昧を宗と爲し、亦念佛三昧を以て宗とすと。

經には一々之を觀じて極めて了々に閉目開目にも散失せず、唯睡時を除きて恒に此事を憶へ、如是の想を名つけて粗(ざ)極樂の地を見るとす。若し三昧を得ば彼國地を見ること了々分明にして具に説くべからず。

又一(は)ら佛を憶ふべし所以はいかに、如來は是法界身一切衆生の心想中に入り給ふ是故に汝ら心に佛を想ふとき、是心卽是三十二相八十隨形好(すいぎょう)、是心作(き)佛、是心是佛。諸佛正徧智海は心想より生ず、是故に汝ら一心に佛を想ふべし。

導師は若し行者等此三昧を修する時には失意瞽盲暗啞痴人の如くならばこの定(ぢやう)得易し、若し然らずんば三業(さんごふ)は縁に隨つて轉じ定相波を逐ふて飛び、縱令千年の壽を盡すとも法眼未だ開けずと。之れ念佛三昧の寶鑰を用ゆべき修養法をかくもよく經驗に富める處の導聖が吾人が爲に指南し給ひしなり。要する處、行住坐臥二六時中唯一(は)ら佛を思想憶念す。

一心に佛を念する外に佛眼開くべき原因あることなし。

念佛三昧に神(しん)を凝し若しは漸次に若しは頓速に如來の和氣に感じ法眼卽ち開くべし。法眼開くとき卽ち我心靈の曄瞳なり。譬へば金烏東天に昇りて春夜の眠より醒るとき乾坤面目を現はす如く、心眼の醒たる曉に於て淨き心靈界は霧れわたり。神祕の美天國は開かれたり極樂の東門は闢けたり、其の衆寶莊嚴の光景萬物は晃耀焜耀として極りなし。其象相つぶさには觀經に説給ひし如く。つぶさに説くべからず。

口稱三昧——近縁親縁増上縁

聖源空は平素専ら口稱の一行を以て多年の功つもり竟に三昧を發得して淨土の莊嚴寶地また如來の相好色身等を觀給ふ。されば自から詠じて、阿彌陀佛と申すばかりをつとめて淨土の莊嚴觀るぞ嬉しきと。然聖の好相感見のことは自から記し給ふ三昧發得記に錄せり。

宋の高僧慈雲法師の勸むる處は甚だ易行なり。意に曰く、人若しは官に朝し利の爲に市に趨る。業務多端なるも常に意に佛を憶念すること、譬へば若し人心中に切なる事の密に懸念して其胸中に往來するあらば縱令身の業事作務の中に於ても心中の密事は失はざるが如し。若し常に中心實に佛を嘉(こ)せば何の口か之を忘れむ。意常に佛を憶念する時は方便を假らずして見佛を得。譬へば香を器に容れ置く時は器物還つて香を薰ずる如く、意常に佛を憶念すれば佛に同化する。若し衆生の心意佛を念ずる時は佛化せざるを得ず。若し心意佛化する時は心佛を見る何ぞ難からん。

淨土を開くの寶鑰は、佛教に之を説くこと甚だ多しと雖も、見佛三昧をもて最とす。行住坐臥に時

處諸縁を擇ばず、唯一ら如來を憶念するにあり。若しは口稱にもまた觀念にもそは其人の意樂にまかすのみ。口稱また觀念等は手段にして見佛をもて目的とす。心眼開發して見佛するを宗とす。見佛の要は一切心意を佛化するにあり。若し心眼開發すれば佛及淨土莊嚴は正に現前す。如來光明に由つて自己を觀する時は自己の觀念即ち法界に周徧す。所觀の如來の光明遍法界の故に能觀の心念また法界周徧なり。ここに於て時間に於ても空間に於ても一切の時一切の處に於て如來と寸毫の懸隔あるを見ず。形式に於て如來と接近不可離の關係を完うするを近縁近縁と云ふ。

次に如來光明を不可離的に證認するのみにあらず、如來の内容と仰ぐべき大我の愛即ち無縁の慈悲と吾人の心情とは融合し、如來大我の大慈悲の暖溫に感觸して吾人の心情融融し不可思議歡喜無量。如來と衆生との親密なる關係は、如來の慈愛は父の如くまた母の如く父にあらざれば生ぜず母にあらざれば育せず。また如來に對する愛慕の念は戀人に對する如きあり。また愛の維繫は同愛同喜相愛親和の感情は其内容を一にす、愛する人の喜は即ち吾喜びと感じ、如來の大愛光に對する衆生の愛樂は其親密の濃かなること其愛慕の甘きことまた加ふるなし。故にこの關係を愛人の親和に比すべし。

尙深く如來に對する親縁の内容は、靈我の即ち大なる我、此と彼との兩方にあらはれし如く、靈我

をあなたに投映して如來なるや、如來の大我が我靈我として我靈と現じ來りしや、此彼融合して相分つべからざる不可思議心情として靈的活動し現ぜり。之の内容の最親密なる關係を有するが故に親縁と曰ふ。

如來の中に常に光明に靈化し更生し來りて後の精神生活には如來の光明は増上縁の加被力となる。之は衆生の闇き心に光を與ふ。例せば謂ゆるアキラメがよくなる。アキラメとは眞理の光明に自己を返照し、理性の光にて能く自己の感情を自覺し、自ら感情を諭すこと。例へば今我病氣を傳染せしにつき云はゞ、我人の爲に看護し而して此病を傳染せし全く己が不注意の爲に起因す、決して他を恨むべきにあらず。また俗に云はゞ宿縁の免れざる處とかまたは自己の意向に於て正しからざりし爲とか、なを進んで如來の光明によりて自己を照し見る時は敢てせず、エピクテタスが未だ哲學を學ばざる時は自己他人を責む、而して道に入りて後には人を責めず自己を責む、修行よく熟する時は人をも己をも責めずと言ふ如く、能く如來の光明によりて自己を返照するときは、いかなる出來事禍害に遇ふとも自ら全く理性の光にて照す時は世上の感情は慰安と感じ來る。又意志を靈化する増上縁あり。

佛 佛 相 念

「佛と佛と相念じ給ふこと、今佛も諸佛を念じ給ふこと無きことを得んや、何が故ぞ威神の光々たる乃ち爾るや。」

是文は釋尊が、徒^(おぼ)阿難を以て自己の宗教的内容を語らしめたものとなす。意に曰く、我世尊の如來よ、斯の小さき弟子の胸を以て大なる世尊の胸を語らしめよ。私が小さき胸に或る出來事の爲に或は悲傷に耐へず或は忿恨に勝^(か)へざる時にも、しばらく胸を靜めて最も愛敬し奉るところの慈悲深重なる世尊を憶念し奉る時は、世尊のいと懷じき慈悲の面影は彷彿として目前に幻現す。其の靈象に射らるゝ時に忽ちに我胸は融解して、すべての悲しみもまた憤りも朝日の前の霜の如くに消失し、かへつて悅豫と慰安とがのこれり。私が爾る如く大なる世尊に於せられても之れと比すべきことが在せられん。

淨界に在す大なる如來が在まして其如來を念じ給ふときに、私が世尊を念じ上るとき胸中に無限の

靈感ある如く、大海に太陽の光が映寫する如く、淨界の如來を憶念し給ふ時に、世尊の胸中に、宇宙に響き互る如きの靈感が在ますならんと想はる。之を佛と佛と念じ給ふことなきを得んやと白(三)し上げた。

時に世尊が阿難を譽め給ひて、阿難よ、汝が能く是の問を發すは實に快し。諸天に教へられて斯く問ひしや、將汝が自己の所見を以て此問を發せしやと。

阿難は白(三)して言(三)さく、諸天が來りて我に教へたるに非ず、自ら所見を以てかくは問上りしのみと。

佛のたまはく、實に汝が今の問は快よし。能く此問を發せし。此問の價值は無量である。その爲に如何に數多無量の諸天人民を開發し度脱するか量り難し。此の問にて一切人民の救度は開けぬ。一切衆生、無明闇黑の中に日光は明け渡る。實に如來は無盡の大悲を以て世に出現し、此の佛の出世に遇ふことは靈瑞花(イソギトクサ)に遇ふよりも難し、と。

華嚴法華等は大哲人としての釋迦にて、今斯の教は大宗敎家としての世尊なり。

大宗敎家としての世尊は、宇宙には盡十方無碍光如來常恒にましまして、攝取の光明普く十方世界

を照し斯の光明に攝取せらるゝ者は悉く靈化せられて開化せらるゝなり。開とは衆生の佛性が開發せらるゝこと、化とは衆生の煩惱が解脫靈化せるゝことなり。斯の光に遇ふ者は、無明闇黒の凡夫は永恒に光明の人と更り、罪惡苦惱の衆生が正善安樂の者と化すなり。

教祖の人格に現れたる彌陀の光明

宇宙獨尊の如來の光明は、覺りの眼の開けぬ私共には初の程は直接に瞻(み)むことはできぬ。然れども教祖釋尊の人格に反映せる光明に於て彌陀の光明を窺ふことが出来る。

頌に、例へば西に日は入るも光は月にうつる如と、無量壽王の日光は牟尼滿月に輝やけり。

若し喩へて云はゞ太陽が西の山の端に入りて了へば、此地上は昏くなりてしかももう太陽の光を見ることが出来ぬ。されど東の天に皎々として照す滿月の光は何れから來るやと云はゞ、西に入つた日光が映寫して滿月の光として輝いて居る如く、私共心の昏き凡夫の眼には、直接に彌陀の尊顔を拜むことはできぬけれども、釋尊と云ふ最も圓滿なる人格の光は本々淨界にある彌陀の光明から映り來つたのである。無量壽經の序文に明かに現はれてをる斯の御文ほど釋尊が宗教的人格を明かに表現して居るものはない。斯の經文を拜む度に辱く思う。

彌陀の光明を被れば、何人も大小となく皆分に應じて光明の生活に入ることが出来る、光明生活に入れば分に三相五徳が具はつて来る。釋尊は自ら彌陀の光明を受けて、自己人格の光明を現じ給ふ聖意は、彌陀の光明を被むりて人格が新しく生れ更りて、三相五徳が具つて來て、光明の生活に入るの、釋尊が彌陀の法を説くことは、すべての人々を光明生活に導く爲である。彌陀の光明を被むれば斯やうに爲り得らるゝと云ふことを示す爲に、釋尊は彌陀三昧に入り給ふたれば（三昧には心を統一して、釋迦の心は彌陀の光明に入り、彌陀は釋迦の心眼に視え給ふ）一心鏡の如くに明淨なり。釋尊の心は宇宙徧虚空、彌陀光明界となりて、彌陀尊、虚空徧滿の大身、相好圓滿にして光明徧ねく十方界を照し給ふ。乃至淨土の無比の莊嚴が現前する。其時に、彌陀の大光明が釋尊を照し給へば、彌陀の靈徳に受映し充滿されたる釋尊は、恰も日光に反映する滿月の如くの人格と現はれ給ひき。

其の彌陀の靈光の滿たされたる釋尊の相を經に示して、

「爾時 世尊諸根悅豫、姿色清淨にして、光顏巍巍たり」と。

佛華嚴三昧

釋尊成道の初に天眼明を得て、廣く空間に徧ねく、次に時間的に三世に通達して、一切衆生の此死彼生等の事を現前し、彌々臘月八日の曉に無明生死の夢醒めて朗然として正覺を成じて、生死の源を盡し煩惱の元を斷じて、涅槃永恒の光明を發見せられた。此時に於て釋迦佛陀が樹下に在つて佛華嚴三昧(さんまい)に入つて眞實如來の靈界を顯現せられたり。

其時に普通人間より見れば、悉達太子が樹下に跌坐して安眠するにあらずやとのみ見ゆるけれども、釋尊の心靈に立ち入つて見れば、宇宙全體を盡して悉く眞善微妙なる甚深なる蓮華藏世界にて、其の中央に盧舍那(ろしやな)如來無量の相好無邊の光明を放ち、微妙に莊嚴せる淨界に在しまして、法身大菩薩衆の爲に甚深の妙法を説いて他受法樂を受けしむ。

盧舍那如來即ち法身無量光如來である。是一切諸佛神天の本地、一切萬法の本源である。是宇宙の中心たる獨尊である。之を無量壽經には無量壽如來威神光明最尊第一にして諸佛の光明及ばざる所、

是故に如來は無量無邊の光明を以て常恒に十方世界を照して、一切衆生をして斯光明に觸るゝ者をして清淨と歡喜と智慧とを得しめ不斷に靈的に活動をなさしむと。是が即ち釋尊の發見し給ふ所の獨尊である。

故に宇宙の獨尊者は孔夫子の觀る如き唯だ畏敬すべき計りではなく、無上の智慧と無限の慈愛を以て一切衆生の父たり君たり尊きもの辱きものである。

其唯一獨尊は空間に徧して照すが故に無量光と云ひ時間に互つて永恒不滅の故に無量壽と云ふ。即ち是れ一切諸佛の本地一切妙法の淵源である。

彌陀と釋尊

諸佛最尊第一の彌陀は即ち宇宙唯一の最高中心の尊體にして絶對的最大人格の至尊なり。宇宙にはこの靈的人格實在するが故に、暫く宇宙の一分たる此地球上に釋尊となり人格として實現せるなり。釋尊は地球上の賢聖に勝れて唯一絶對の人格なり。最圓滿なる聖者なり。斯圓滿なる釋尊は即ち宇宙

中心の獨尊の人身現なり。此人身現の釋尊宇宙絶對大の中心靈體に歸する時は即ち彌陀佛なり。若し宇宙に絶對的の靈體の本地なかりせば此地球上に人身人格の顯現すべき元因なきなり。また釋尊の暫らく地上に顯はれたる圓滿なる人格を以て現ずるにあらざれば彌陀の實在は衆生知るに由なし。故に彌陀と釋尊の關係は天の月と水に映ずる月の如し。水中の月は天に在る月なり。若し天に月なくして何ぞ水中の月在らん。釋尊てふ靈的人格は宇宙に存在靈界に存在する靈的滿月が此人界に映現したるに外ならず。

釋迦以前印度教の一神と彌陀

釋尊以前に印度に於て大自在天なる宇宙唯一神の信仰は在りしならん。天に絶對なる神が存在するならば、其現（一）して此地上に神を代表する大人格の出現すべき筈なるに、印度教には、宇宙唯一の圓滿なる人格的の神を證する程の地上に人格現なきは、其宗教が天の神に接觸すべきの道なき故に、人の宗教的衝動として天の一方に人格的神を憧憬するも、神はいかなる人格的なるか、いまだ眞容を表はすに人格の顯現なし。此に在來の印度に於て未だ在らざりし釋尊なる世界的の大人格が出現せられたり。此靈的人格こそ宇宙唯一の神尊の靈德を表現すべき人格たり。

然るに小乗教の人は、人格即神なり佛陀即神なり、この人格の前には天の神も奉仕し尊敬するてふ信仰は在れども、釋尊なる人格が此地上に出現するには宇宙に唯一の絶對的大人格實在して其れが地上の人格現なるの眞理を知らず。また在來の印度教にては天の神在るを信ずるも地上に世界的大人格の神あるなし。斯宇宙大なる絶對的人格が地上に出現して一切の人類を絶對人格なる神尊に歸命信順すべきの眞理を教へ給へり。この眞理を明らかに證明するは即ち大乘教のみなり。

人佛釋尊として出現せる釋尊は、最高中心彌陀の分身にして人格現なり。例へば月は天に在て影が水に映ずる如し。彌陀は天佛の月に例し、釋尊は人佛にして水中の月の如し。故に彌陀は絶對の靈格にして人類の測知する所にあらず。然れども釋尊なる人佛として出現せる故に吾人は人佛釋尊を通じて、天佛の彌陀を信解すべきなり、斯眞理を明にするもの獨り大乘佛教のみなり。

宗教の眞髓

釋尊は宗教の眞髓は學說理論の間に發見すべきに非ずと自覺し入山學道せり。若し學術に於て得べ

くんば王城に在つて天下の學者を集めて研究すべし。然るに入山學道、伽耶に成道せる世尊としての光は世を照す。導師（註―善導大師）は般若道場に三昧發得して、我證を以て世に知らせんと。空祖（註―元祖大師）はその三昧發得記にある如し。宗教の眞髓は靈的活力を養ふにあり。自己の靈火燈され何人にも分つ。

見よ釋尊の入山、導師の三昧。宗教家は此靈光を得て之を傳播するを目的とす。
説明は方便なり。

入道場の心得

生死事大無常迅速を忘るゝ勿れ

生の從來する所、死の趣向す所は何れ

何を以てか一大事とする

我とはどんなものをかさす、我所（わがところ）もまた然り。此軀これなものぞと自ら窮めよ。

此身及びこの世すべて夢の如くなるをよく細かに思ひみるべし。

此まゝの境界幻の如くなること眞實にあらざることをしるべし。

三業を調熟すべし、み、くち、こゝろ。

口に稱へて佛を捨てざれ。

意に見佛の想を離さゝれ。

常に佛の照鑑をかしこめ。

首座、先づ大衆を勧めて三寶に歸せしめよ。首座たるものは大衆の模範となるものなれば最も佛祖の照鑑をかへりみ、内佛意にかなふよふ、外儀如法たるべし。

内常に佛を離れず、外威儀嚴。

入道場前方便

別時道場に入らむと欲せば此四法を備へて而して後に加行する時は其功必ず成ずべし。若ししから

ざれば勞多くして功少なし。

一、樂欲(たらく)——六道生死の苦海を離れんと欲し、念佛三昧を得て眞實身の阿彌陀佛及光明淨土莊嚴の相を見んと欲する志を養ふべし。經中の要文を讀みては、彼西方彌陀佛をおもひ、相互にすゝめで志しを淨土に誘ふべし。語ること多くは淨土を讚歎せよ。いつしか志し深くなりゆくべし。志し深くなりゆくにしたがつて、いよ／＼願ふ心も起るべし。願ふ心益々切なるによりてこれを好む心切なるべし。之れを好むこと深ければ之れを樂欲すること切なるべし。樂欲とは佛及び淨土を見んと樂欲する心なり。

二、精進——一心堅固にして五蓋を棄つべし。五蓋のために蓋はるときはたとへ道場に入とも唯空しく時日を消費するのみ何の益かあらん。精進とは一心金剛の如く我を忘れて阿彌陀佛に精密に進みゆくなり。

聲々念々悉く所念の佛に至らしめよ。餘念のために亂しめることなかれ。

三、念——世間は皆悉く虚偽なり欺誑なり。この虚偽の幻境にまどはされて眞境にいたること能はず哀れむべし。唯眞境の阿彌陀佛を晝夜戀念してしばらくも忘るゝことなく孔子の母を慕ふが如し。

まことに惟れば我ら無始より生死の暴流(むつ)におぼれ無明惑業の羅刹に害惱され暫くも安穩なることを得ず。幸に遇ひ難ふして彌陀慈父の御名を聞くことを得たり。殊に八萬相好我を照覽し、佛眼我を視、慈悲子を思ふの深き御心を察し上(さ)れば、須臾も憶想せざることを得んや。我佛を念ずること深ければ佛もまた我をおもふことまた切なり。古來見佛するもの多くは戀念のふかきにあり。

四、巧慧—善巧慧を以て世間娛樂は夢幻の如くなることを籌量して、三昧定樂の最とも勝妙なることをしる。

巧慧なきときは妙境界に入ること能はず。巧みに佛の相好をとり淨土の莊嚴光相を察して正境に入るべし。

聖像の印象

美術的表象によりて心を靈界に逍遙するものを三昧美的表象と云ふ。之と異り、實感とは美術的彫刻の聖像または畫像等を好古家等の鑑識的眼にて彫刻若しくは畫家の巧拙を鑑識する如きを云ふ。

今は其彫刻若しくは繪畫の聖容を親見して、其の印象を心眼にうつして、想を凝神する時は、其の聖像に誘引されて神(ご)を靈界に逍遙せしむ。音樂に於ても又爾り。

魔事を示す

魔事とは、行者三昧を修する時、或は内心不調の爲め、安心豫備不完全の爲め精神に異狀を起して、または生理的に腦髓の錯覺妄覺幻覺等の起し易きにあり。之を三昧中の魔事と爲す。また業相(ごう)と名づく。信論に或は衆生ありて善根の力なく、諸魔外道鬼神の爲に惑亂せらるゝと。

若しくは坐中に於て形を現じ恐怖し、或は端正の男女等の相を現はす。或は天の菩薩の像また如來像を作(な)し、相好具足し、若くは陀羅尼を説き、乃至無因無果、畢竟空寂是真涅槃なりと説き、或は人をして宿命過去の事を知り、亦未來の事を知らしめ、他心智、辨才無碍を得せしめ、能く衆生をして世間名利の事を貪著せしむ。又人をしてしば／＼瞋りしば／＼喜んで性常準なからしむ。或は多慈愛多睡多○多病にして其心懈怠ならしむ。或は率に精進を起して後便ち休廢し、不信を生じ、多疑

多慮、或は本の勝行を捨て、更に雜業を修す。若し世事に着し、種々に牽纏、亦能く人をして諸の三昧の少分の相似を得しむ。皆是外道の所得にして、眞の三昧に非ず。

記に曰く、若し魔の所作を是善相とおもつて、心に執着せば則ち邪網に墮す。若し又實に是善根所發の境を、魔事とおもつて、心に疑うて捨離せば、則ち善根を退失して終に進趣なし。是故に邪正實に別を取りがたし。

今しばらく古徳の相傳に依り略して三法を以て之を驗す。一に定を以て研磨し、二に本より修治し、三に智慧觀察す。經に言ふが如し、眞金を知らんと欲せば、三法を以て之を試みよ。謂く燒と打と磨となり。行人亦爾り別識り難し。若し之を別たんと欲せば亦三驗を須ひよ。一には則ち當に與に共事すべし。共事して知らずんば當に久處すべし。久處して知らずんば、智慧觀察せよ。今即ち此意を借りて以て邪正を驗す。謂はく定中に境相發する時、邪正知り難き如きは、當に深く定に入りて、心に彼境中に於て取せず捨てず、但平等定に住すべし。若し是れ善根の所發ならば、定力愈々深く善根彌々發す。若し是れ魔の所爲ならば、久しからずして自壞せん。第二に、本に依りて修治することは、且らく本不淨觀禪を修するに、今則ち本に依りて不淨觀を修す。若し是の如く修せんに、境界増

明ならば、則ち偽に非ず。若し本を以て修治せんに漸々に壞滅せば、當に知るべし是れ邪なり。第三に智慧觀察は所發の相を觀じ、根源を推驗するに生處を見ず。深く空寂と知りて心に住着せずんば、邪は自ら滅すべし。正は當に自ら現ずべし。眞金を焼いて其光色を益すが如し。若し是れ偽金なれば即當に焦壞すべし。此中の眞偽當に知るべし。亦然り。定は磨するに喩ふ。本治は猶〇を打が如し。智慧觀察は之を類するに焼を以てす。此の三驗を以て邪正知ることを得べしと。應に知るべし。外道所有の三昧は皆見愛我慢の心を離れず世間の名利恭敬を貪著するが故に」と。

要するに三昧に入りて啓示を期すること、宗教的關係を結合し、鞏固なる信念を獲る爲に、正しく恩寵獲得、神人合一の眞を實驗するにあり。最も眞面目に最も至誠に凝神摧勵するにあらざれば得べからず。

若し僅かに光耀を感じる如き場合には、堅固にあらざる時は僅かに光耀を感じる如きに際して、動轉狂噪して、眞摯なる信心を狂はす。最も慎重すべし。

啓示は自己が解脫を得べき靈的生活過程の光明なれば、全く自己の救済に對する恩寵なり。之を却つて名聞僞慢の材料の如くにせば、忽ち煩惱魔の爲に心靈撓亂せられん。魔事といひ、業相といひ、

三昧修養の不調整より惹起すべき心的現象なり。

三昧寶王論に曰く、問、魔光佛光、自觀他觀、邪正混雜す。願はくば一々之を示せ。對(ふた)ふ。人想に依りて即ち現するを自と云ひ、正と云ひ、想に依らずして現するを他と巨ひ、邪と曰ふ。謂はく、本白毫を想ふに白毫現ぜざる如き、其本心に乖(へだ)ちて。況んや諸想をや。又魔光は影(かげ)の眼を耀(やが)かす有り。佛光は影の眼を耀かすなし。楞伽に云く、照耀盛火の如く、光明悉く徧至、熾炎目を壞せず、又眞光は念佛の人の身心を澄淨清淨ならしむ。僞光は念佛の人をして躁動恍惚せしむ。

三 味

腦（精神の府、扶根、勝義根、神識 藏識城廓）

因腦漿は（識と一にして二、色卽是心。四句分別）所緣の境（六塵）をうつして（受）其色聲等の影像名言等を想ひとり、これは何物なりやと作意して（思行）了かに何々なりと別けて識る。

腦の生得や構造等の別々なる、相（清濁）性（敏鈍）體（大小）力（量多少）作用（巧拙）なる本因に生得として異なるべし。外縁の薰習修練によりて其果は大なる差別をなすべし、性相近、習相遠。

腦漿を澄ましむるには禪定の法によつて數息等よりするもよし。腦漿中に一塵も置かずして氣を丹田にとどむべし。腦裡一物（色等）をも置く時は（色聲等に就て貪等を想ふ）蓋となる。氣血とよむる故に腦漿をして湛澄ならしめず。

一心念佛三昧の中に入る時は心王宮入出の門をとどて、一心正面西向して、佛陀日輪に對し、欲樂し、欣慕し、佛を見んと欲し、戀慕日夜にやまず、寤寐之を思ふて失意瞽盲痴人の如し。心華開て相好微妙なることを見る。時に身心融液不可思議なり。微妙、感應同交不可思議、歡喜言語道斷、自知、知解を絶す。

此妙境不可思議、三昧無爲即涅槃。

ゴウタマ皇子出家入道三十歳、臘月八日曉、廓然大悟、入佛華嚴三昧中、舍那圓滿の月十地等覺の根本無明の雲の中よりあらはれて塵沙の妙相皎々。

○

一、因緣相離れて云何が修行の進むべきあらん。内因空にして外緣空を觀するも空を緣するにあらずや。(緣生にて本空なるを觀するは)修行功久ふして腦水漸く澄湛にして一塵もなく、少の動波なく、時に腦本性の眞面目あらわる。無意無念にして自然に法界の空眞を緣ず。譬へばすみ湛へたる水中に空天をうつすが如く無念にして交通す。

禪家に初心に一の公案を授けて工夫せしむるは、腦裡に名言の縁をかりて一心に工夫を凝しめて、終に豁然と貫通するは腦脈を折判せしむるの方なり。然れども名言の上に泥滯して理會了解を求むれば、たとひ數年の苦をなすとも空く妄念を増すのみ。一物をかりて腦脈を判決して通ぜしむれば、腦をよく成らしめて心のはたらきをよくせしむべし。よく分判すれば應用無礙なり。爾らざれば心が境に對して通曉することかたし。

若し法界の中の佛境界を緣じて心境自在ならしめんと欲せば念佛三昧に若くものなし。行者の腦脈を判んと欲せば、能念の心腦裏所念の阿彌陀佛眞金色なるを念ず。

大乘佛敎は概して三摩地の境にして、即ち能く心想鍛鍊により開きたる華の色香莊嚴の境なり。

問。淨土自己の心中にあり何ぞ遠く十萬億土に求むるや。

答。汝此肉眼を以て靜夜空中に列せる星宿を觀よ。かの無數の星の數類はこの眼識界に攝するにあらずや。彼の星宿恒星惑星の如き何れも太陽及地球等の類屬なるべし。この拙劣なる扶根を藉る眼界已に無數の刹を容る。況や心性の無邊なる何ぞ十萬億土及六方各恒沙の刹を心想中に攝せざらんや。汝十萬億土の距離を疑ふこと心は方寸の裏にありて十萬億を心外と想ふや。若し爾らば汝が心は實に

せまきものなり。只肉團の裏にありと想ふや。かの法界中に無數の刹土あることを疑ふや。若し爾らば法界に邊際ありと思ふや。若し法界かぎりあらば虚空の表如何なるものぞ。虚空無邊際なれば利海何ぞ數量すべけんや。

○

法種薰發の法はみだの御心 本願の名號。

宗體を定めしむる法を所被の機の腦中に薰習せしめ、よく心の宮に納りたるのち、方便を以て所受の法を開發せしむ。

所歸のあみだ佛、所求の淨土の莊嚴をきゝてこゝろに知り、後一心に念佛して薰修久く、心開發して、かの所念の境と相應して證得すべし。經によりて文を薰習せしめ義を開發し信を立て行を修し證を得。

自己生得の大心性は無限の徳を有すれども法界の諸縁にふれて薰習の修徳によらざれば性徳も顯すこと能はず。

自己の心性には有爲無爲の法を受得て發育すべきの性本因ありと雖も之を開き之を示し悟入すること能はず。之を一大事の因（所熏、自己本性）縁（所受）と云ふ。本衆生（性）本因ありと雖も増上縁なき時は開發して無上覺を證する能はず。

若し自己にのみあり他に勝縁にあつからずして大覺を證するならば、凡夫の妄見外道小乗の機類も誰か佛性なきものあらん。然るに彼らが邪見偏見に入つて圓滿に正覺を證せざるは是全く大因縁の缺けたるにあらずや。

禪は宗教と云ふりは心の鍛鍊術と云ふが適當なるべし。

一心が彼の所念の阿彌陀大光王を念じ、勇猛精進金剛の如くなれば、終に能所一となる是を三昧と云ふ。又盡十法界は彼の所照の境なれば亦其境内も亦我にあたふ。

一心に念ずれば、能照の彌陀所照我中に入る故、内證法界を照し、つひに外にあらはる。元祖の頭光亦闇夜の光明彌陀よりうけたるにあらずや。

心の廣きも色界の大を以て顯さざればあらはれず。心體本大小の差を離るゝが故に、

淨教の徒難僧小經をよみ習ひ、謂へらく十萬億土の彼に淨土あり六方各恒沙の佛土ありみだ佛大光

明十方を照し六方各大光明重々に無盡と、漠然とは云ながら心の範圍の中に納む想界甚廣きにあらずや。小僧は、之を自心の範圍内なりあゝ自心の區域廣いかなと云はざれども、自ら其の區域の無邊をなせり。禪の小僧が、十萬億土なんと云やうなそんな外に大きなことがあるものか、何も皆胸の中なりと理想を畫く。其思想の甲と乙との區域分齊大海と一滴とにあらすや。あゝ聖教の我らに理想をあたふこと廣大なるにあらずや。

見よ昔の人には博識の人なりと云とも世界は唐日本天竺にかぎれりと、今の地球儀を常に見て居る少年の思想の範圍にも及ばぬ。禪の六祖の如きの大修行者も聖教に接せざれば心界は唯廣きものだらうと謂つても、物界の十萬億なんと云ふやうな、とひやうもない大きいものとは想はなんだ。夫故聖經によつて思想をいだく小僧にも心の範圍は及ばない。

座をかまへ、一心大勇猛精進力を以てしもくを以て鉦をうつ。其しんにうちこむ。

此高聲の口稱は一聲々々悉く十方法界に響き渡りて到らざる處なし。何を以ての故に。此心十方に遍滿するが故に。心遍する故に聲も亦遍。聲遍するが故に眼亦遍す。

○

問。(此心を離れて淨土なし)、阿彌陀經に何ぞ十萬億土と云ふや。

答て曰く、色界の十萬億土及六方恒沙於其國を以て心界の無邊なることを知らしむ。

若し單空心内の淨土と云つて十萬億土を説かずんば、たゞ心は方寸の中と想ふへし。何そ夫れせまきや。佛彌陀經を説て我々が心界の無邊なる色界微塵國土を容るゝことを知らしむ。

問。心淨ければ土淨し。何ぞ外莊嚴を説くや。

答て。汝は淨とは但空と想ふや。但空に何ぞ淨不淨あらん。今淨と云は不淨に對す。若し淨土の無盡の莊嚴を顯すにあらずんば、いかでか心具の清淨なることを知らん。

あゝ大乘圓滿の修多羅無盡の佛及刹土と無盡の妙色莊嚴を説いて、我らが心界の無盡をあらはす。かの小乗の但眞、外道の邪空、凡夫の妄空の比ならんや。

常に彌陀經によりて自己の心内無盡の刹海を攝容することを知るのみならず、我心常に此中に逍遙す。是經の恩にあらずや。

○

一心不亂に行住坐臥聾啞痴人の如く作意觀察して念々不捨にし猶一心金剛の如く勇猛精進なる時は三昧發得して妙境と相應すべし。

腦中に能心彌陀佛をさしはさみ、所念の境に念々力を用うれば、腦脈横斷して所縁と相應す。是を念佛三昧と云ふ。若成就する時は身穢土にありて心常に淨境に入り、三昧無爲即涅槃。斯の如くは單空をたつとぶ離繫のたぐひのうかどひしる所にあらず。

無塵法界 恒沙功德 寂用湛然。

○

一心に念佛して腦脈已に分るれば全體露出す。雲はれ霧拂つて富嶽雲中より露出するが如し。無始の闇はれて人界の妄執はれて淨土瑠璃の光界に入る。清淨なる靈界肉眼界の妄境の比に非らず。金山の麗日清淨の天に在り。心境已を忘れて不可思議なり。

あみだ佛と心を西にうつせみのもぬけはてたる聲ぞすゞしき

仰て盡虚空徧法界に慈悲と智慧との光を以て充たしめたまふわれらの救主彌陀神尊を崇め、

伏して此忍土に應身を現して悲智圓滿せし救主釋迦牟尼の教を信順す。三心具徳の窓の前には無上功徳の月光をまし、寂莫無人の扉の内には五〇〇妙の風調べを添ふ。

○

念佛の行者一心金剛の如く勇猛精進なること不動明王の如くなるべし。腦裡に一物もおかず。能歸の心所歸あみだ佛の眞金色圓光徹照するを執持し一心不亂に腦裡に充る力眼睛を電掣、眼睛の掣電するは能歸の心が所歸のあみだ佛に投する一心の發現、頭に光明を發する尊體は所歸の佛が能歸の腦裡に映現するすがた、能歸所歸性空寂、感應道交難思議、故我頂禮彌陀尊。

一心金剛の如く頭に力あり、ウント氣を丹田としりにすへたること大磐石の如く、勇猛の力用は右手のしもくに現はす、ト傳が劔を執るも比にあらず、左の手の數珠の念々不捨離は臂のこぶしに現はす。兩足の構ひかたは荒木が較にあらず。

業事成辨は稱名の聲に發し、發得の力はしもくの上に見ゆ。

一聲稱名十方に徧し一一〇〇三際に徹す。一捶摧破曠劫夢。一捶〇斷二十五有。有頂より無間底まで。

(註——之は圖に讀したるものなり、圖は彼方には如來尊容ありて、此方に行者の坐形あり、頭上に如來小尊容を頂き、右手に鉦を打つ撞木を掲げ、左手には珠數を取る、臂、脚、丹田の相は文の如し。)

○

一、腦の體とは本來法爾として自然のまゝ、初未た漠然として茫々冥々たる鑛の如く琢磨によつて光をなす。

二、其生得量分段あるべしと云へども、已に受得たる全體をして極度にいたるまで修すべし。性本無限の性徳ありと云へども、畢生の力をつくして自ら充すべし。

三、因性ありといへども助縁を藉らざれば磨くこと能はざるものなれば、これを發育せしむる善知識は最も難遇の想をなすべし。

四、記憶の如きは腦裡に外縁を薰せしむるもの。

五、解説の如きは發解する緣なり。

六、多記多解なるも一境によつて深く心を用るにあらざれば腦脈を深く分解せしむることあたはず。

七、深く工夫を用て一旦豁然として貫通するは腦脈分解して内因心と外緣境と相應したる處なり。

○

一、腦漿澄わたり、腦脈判然として決決し、内因空、外緣空にして、十方洞然として内外交徹靈明なり。

二、自性清淨なりと自性の外に外境なきが如しと謂ふべけれども、よく／＼わけてみる時は内漿のみわたりたる時に、外みな空なりと、凝然たる心相にして若明かに内外を分別する時は内淨外空。

三、譬ば澄たゝへたる水の中に大虚をうつす如し交徹して靈明なり。澄る水に青天のうつりたるをよく觀じてしるべし。

四、因の空に力つよくして緣を奪たる分なり。

五、離繫師が一切の約束を離れて眞正解脱の地と謂ふは、彼祖微細なる明了なる學理の研究より成立

ちたるにあらざれば、能觀所觀の差別を知らず、初よりたゞ一枚板と謂へり。

六、假令能所不二の境に入てもよく／＼しらぶれば能心空漿澄所緣空の等持定の分齊なり。

七、彼は能所の分さへしらず、何に況んや、諸の三昧門の微妙不可思議の妙境界をや。

○

一、腦漿澄清する裡に法によつて法身（とは法によりて作るが故に法身と云ふ。無相法身には非ず）の相好微妙端正にして無比なる所緣の境を、澄淨せる腦の勝義根に模倣して空中に向ふ時は、心界の空中に端正無比なる應身を影現すべし。

二、彌陀身心遍法界、映現衆生心想中。

三、譬へば幻燈（因）のはりの鏡（緣）ばかりなれば、たゞ大圓鏡の如く。

四、若影像をうつせば彼に其影像の映現するが如し。

五（腦識に海印の圖を挿めば）

華嚴藏等の諸の三昧門は腦識の鏡の諸の影像の板をかへるが如し。

六、十三觀は影像の材料をはめ替るなり。

七、腦漿澄淨、腦脈決決して徹照するは定力成就するによる。

八、影像は巧慧の所成なり。微妙の思、審美の想は挿む影像なり。

○

一、因獨り成らず必ず縁をかるべし。

二、本因は（因縁皆空）法爾然るまゝを澄しめて、因（何もなき漿を以て夫に相應せしめたる境を縁する）を以て縁を奪て。

三、因の體量大小ありと雖も其分を究めつくせる到彼岸と云ふ。修行成就せる也。

四、大悟十八變小悟數を知らずとは、可なりに腦脈の決斷せる因が所縁に對して因縁相稱ふたことたびくなり。

五、幼年の腦裡に不可思議的の神聖を敬畏せる縁を以て素養すれば、腦裡に神聖を仰ぐ腦量を増長す。

盡十方無碍光の覺者智慧（色光心光）の清淨光、智慧光、超日月光の光を以て覺せる神は、縁を以て因をたすくれば薰習して、串習は因縁相成て竟に性となるべし。

自性清淨。（自性と云ふとも己の小分の腦よりみれば所縁の如し）

（上の如くの分を多量に含める腦は人中の神聖なるものなり、希有なり、上々人なり蓮華の如しと。）

六、腦裡上の如く薰習ある時は後勝縁に遇ふの日歡迎して腦中に神尊を請じ上るべし。

七、人は小天地なる人體中に靈妙なる神識ありて充てり。大天地の體中亦た大たる神智なくんばあるべからず。應身にして人佛故に釋尊は小天地の中の大覺者なり。報土にして報佛の故に彌陀は大天地の中の大覺者なり。我らは小天地にして性を有せる未覺者なり。大天地の大覺者となる性を有せり。